

公益財団法人北海道新聞野生生物基金

活動する人と応援する人をつなぐ

モリ〜通信



©手塚プロ

Nature Communication Magazine MALLY

No.5 2026 July

野生生物たちの楽園

特集 北海道の湿原

減少する湿原—開発、再生、問われる未来—



[illegible]

夢付き定期預金
スーパードリーム

100万円^(10万円×10本)×8本

4等賞 1,000円×8,000本

※自動継続後は、懸賞金の内訳が変更となる場合があります。



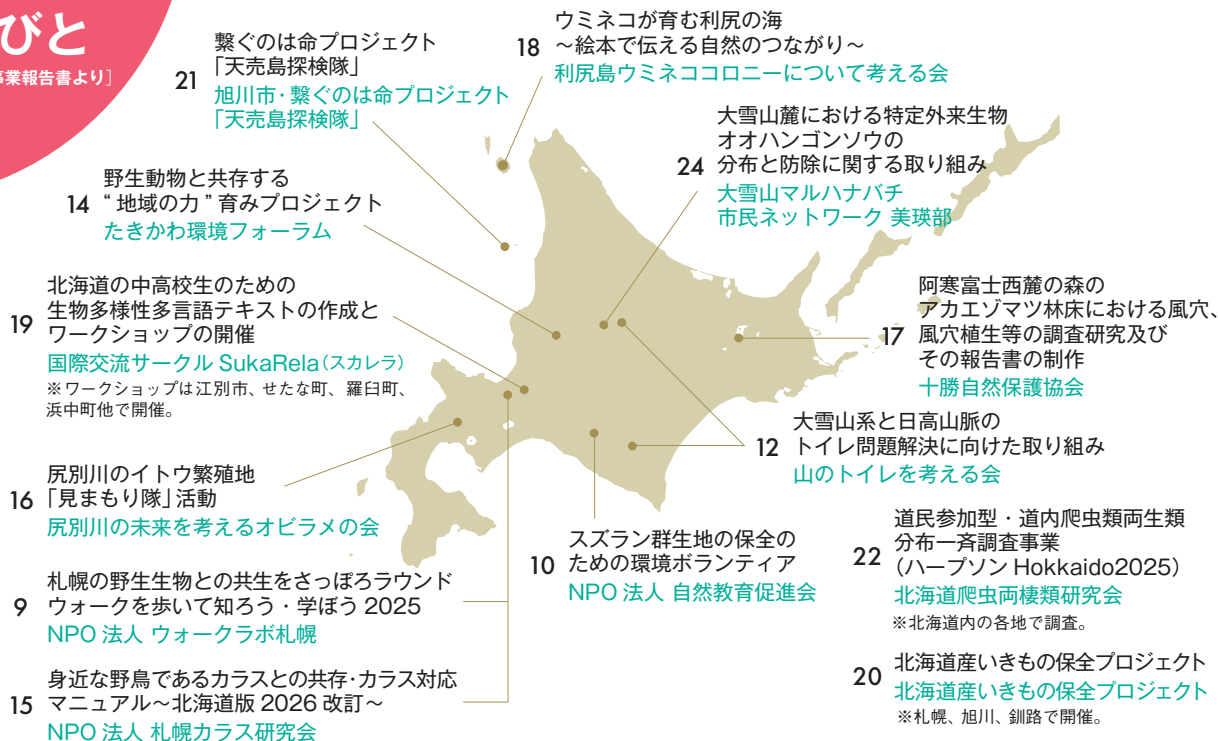
本店 〒099-0495
紋別郡遠軽町大通南1丁目1-15
電話（代表） 0158-42-2141
<https://www.shinkin.co.jp/engaru/>



取り組む人びと

[助成事業報告書より]

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、北海道の自然や野生生物の保護に取り組んでいる団体・個人に助成しています。2025年度は、「一般助成」は9団体に計194万円、「杉本とき鳥類保護助成基金」の助成は3団体に53万円の総額247万円の助成しました。また、道内の動物園水族館9園館が展開する「北海道産いきもの保全プロジェクト」に対する寄付から同プロジェクト事務局に60万円を助成しました。



※地図は各事業が活動を行った場所を示したものです。

特集 野生生物たちの楽園 北海道の湿原

- 32 雪と霧がつくる、世界でも特別な自然
文・写真 矢部 和夫
- 湿原を蛇行しながらゆっくり流れる河川。
- 36 北海道を象徴する代表的な風景のひとつ―釧路湿原。
文・写真 富士田 裕子
- MGロードやトラスト運動など
- 38 人との関わりが強い湿原―霧多布湿原。
文・写真 加藤ゆき恵
- 40 湿原再生は未来への学びの場となりうるか―サロベツ湿原
文・写真 露崎 史朗
- 42 アイヌ語でサルルンカムイ[湿原の神]と呼ばれるタンチョウ
文・写真 正富 欣之
- キタサンショウウオの生息地の保全は、湿原という生態系の維持、
- 44 さらに気候変動対策に深く関わる課題
文・写真 照井 滋晴
- 「再エネか、自然か」という二者択一ではなく、
- 46 「どこで、どのように」景観をデザインするかという視点
文・写真 吉中 厚裕

HOKKAIDO WILDLIFE PHOTO GALLERY

北海道に生きる生物たちの記憶

2 北の息吹

北海道野生生物写真コンテスト受賞作品より

6 第31回北海道野生生物写真コンテスト

- 26 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
[サポート企業][寄付金のご報告]
- 28 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
[2026年度事業計画]

29 第32回夏休み自然観察記録コンクール

ご応募お待ちしております。

助成事業の募集

毎年2月中旬から3月20日ごろまで募集します。

北海道野生生物写真コンテスト

毎年8月上旬から20日ごろまで募集します。

夏休み自然観察記録コンクール

毎年8月上旬ごろから9月下旬まで募集します。

※詳細は当基金 HP をご覧ください。

<https://nature.hokkaido-np.co.jp>

発行者 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
〒060-8711 札幌市中央区大通東4丁目1 北海道新聞社内
TEL 011-210-5773 FAX 011-210-5774
<https://nature.hokkaido-np.co.jp> E-mail: nature@hokkaido-np.co.jp

発行日 2026年7月24日

制作 亀田制作所 印刷・製本 アイワード

※本誌掲載の写真、イラスト、記事の無断転載を禁じます。

本書には北海道産木材を一部原料とした
HOKKAIDO WOOD PAPER を用いています。



公益財団法人北海道新聞野生生物基金と北海道新聞社が主催する「北海道野生生物写真コンテスト2025」の受賞作品を紹介します。
※講評・入選作品は6～8ページに掲載。



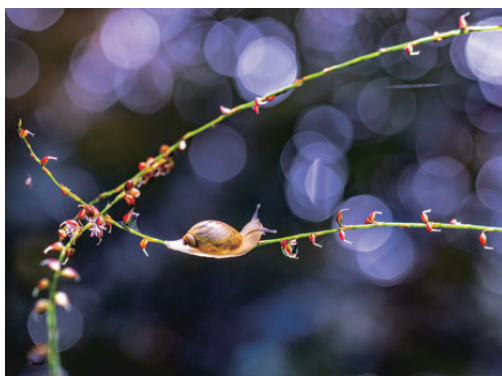
夕暮の銀波に浮かぶ利尻山を背に、雪原を駆け抜けるエゾシカの群れ
動物部門1席「夕暮の雪原を走る」前田 賢一（宗谷管内豊富町）

北海道に生きる
生物たちの記憶

北の息吹

北海道野生生物写真コンテスト受賞作品より





細い茎を渡るオカモノアラガイ
動物部門2席「網渡り」中神 由美子（札幌市）



風景にアクセントを添えるミドリヒョウモンの
鮮やかなオレンジ色
動物部門3席
「にぎわう森の定食屋さん」
多田 和弘（オホーツク管内置戸町）



エゾフクロウの目に入る一点の光。野生に生きるものの気
高さ、尊さを伝える
U30 特別賞「木漏れ日」佐々木新太（旭川市）



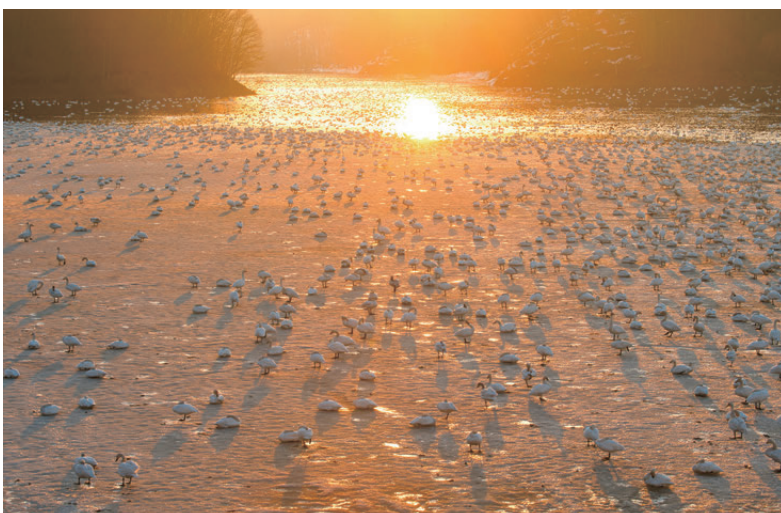
捨てられたロープが角に絡みついたエゾシカ
動物部門2席「羅網鹿」福地 瞳（札幌市）



淡い虹色に透けるシマエナガの美しい羽
動物部門3席
「虹色の羽」坂本 栄造（千歳市）



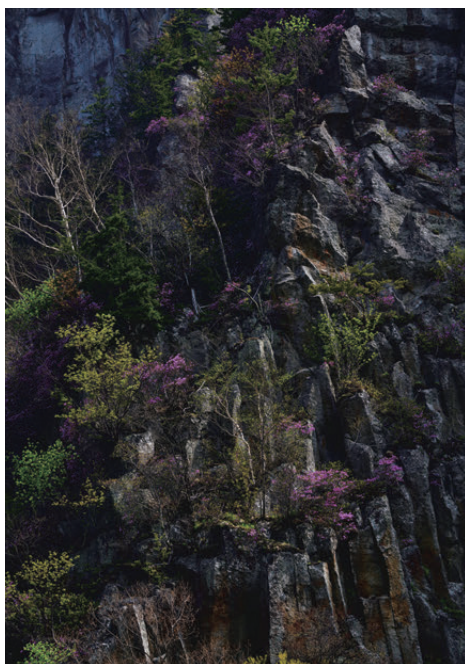
黒色に映える一際華麗なダイサギの飾り羽
動物部門鮫島和子賞
「静寂の貴婦人」
福田 真由美（函館市）



冬の朝陽を浴びて動き出したオオハクチョウの無数の群れ
動物部門3席「朝日を浴びる白鳥」柳渡 利雄（旭川市）



雪残る初夏の大雪山系で咲き誇るキバナシャクナゲ。
夕暮れの低い陽が花卉を透く
植物部門 1 席「カムイ 天上に咲く」横江 憲一（札幌市）



切り立つ柱状節理の絶壁で開花するエゾムラサキツツジ
植物部門 2 席
「春の岩稜」長坂 雅美（北見市）



静かに波立つ淡いブルーの海原を
背にした絶壁を住処にする木々の遅い春
植物部門 3 席
「絶壁に生きる」
遠山 薫（苫小牧市）



次々に頭をもたげ一塊に開
花するヒトリシズカ。葉の
中央で、けなげに咲く姿は
見る者を魅了する
植物部門 鮫島和子賞
「静溢」
横山 達夫（江別市）

第31回北海道野生生物 写真コンテスト

第31回北海道野生生物写真コンテストで、32

点の入賞・入選作品が選ばれました。公益財団法人北海道新聞野生生物基金と北海道新聞社の主催。応募者の総数は223人（前年比57人増）で、動物部門466点、植物部門111点の計577点（同142点増）の応募がありました。動物部門1席には宗谷管内豊富町の前田賢一さんの「夕暮の雪原を走る」が、植物部門1席には札幌市の横江憲一さんの「カムイ 天上に咲く」が、新設した30歳以下の応募者を対象としたU30特別賞には、旭川市の佐々木新太さんの「木漏れ日」が選ばれました。また、全応募作品の中から、同基金オリジナルカレンダー2027年版の動物編13点、植物編13点が選ばれました。入賞作12点と優秀作20点は2025年10月31日から11月5日まで、富士フィルムフォトサロン札幌（札幌市中央区大通西6）で展示されました。

【審査委員（敬称略）】寺沢孝毅（動物部門審査委員長）、奥田實（植物部門審査委員長）、小川巖、中井和子、西村昌晃、川村公人

動物部門講評（寺沢）

1席の「夕暮の雪原を走る」は、何というドラマだろう。空が朱に染まりはじめ、全容を現す冬の利尻山が銀波に浮かぶ絵のような風景のなか、エゾシカが群れて青い雪原を駆け抜けた。

作者はその幸運を逃さず秀作として記録したことが素晴らしい。これぞ自然写真の醍醐味である。

2席の「網渡り」は、オカモノアラガイと2本の茎の曲線が、画像内にバランスよく配置されている。背景の玉ボケをセンス良く取り込み、ほどよく入った赤い色彩も効果的だ。「羅網鹿」は、エゾシカの災難を記録したメッセーじ性のある作品だ。このエゾシカは、春に角が脱落するときロープから解放されるが、人間がつくったものが野生生物に危害を与える事例が後を絶たず、私たちはそれを忘れてはならない。

3席の「朝日を浴びる白鳥」は、手前から奥へ多数が連なるオオハクチョウ、低い太陽がつける影に目が留まる。広角レンズによる撮影が功を奏した。「にぎわう森の定食屋さん」は、パツと華やいだミドリヒョウモンなどのチョウが目を引き立て、チョウのオレンジ色を周囲の色彩が引き立て、バランスよく切り取ることができた。「虹色の羽」は、シマエナガの羽ばたきを、翼を広げたタイミングでピタリと止めて切り取った。羽の先端の一枚一枚まで鮮明で美しい。

鮫島和子賞の「静寂の貴婦人」は、背景を暗くし、ダイサギの白を際立たせた。広がった飾り羽が被写体の美を強調している。

U30特別賞の「木漏れ日」は、エゾフクロウの目に入る1点の光が作品の生命線だ。鋭い眼光が野生に生きるものの気高さ、尊さを伝えている。縦に切り取ったことも成功している。10歳の少年の作品で、感性が素晴らしい。

植物部門講評（奥田）

動植物の撮影において、特に植物は季節による変化が著しい。和名の特定が困難なことが多いものの、名を知ることが被写体の存在感や作品としての価値を高めることにつながる。野生種か園芸種、帰化植物かの確認も野生生物のコンテストでは重要なことである。

1席の「カムイ 天上に咲く」は、残雪の山並みと夕景時の雲がドラマチックに展開するなか、逆光線がキバナシヤクナゲの花を透き通るように映し出している。初夏の大雪山系の姿が臨場感あふれんばかりだが、右端の黒い岩稜が視線を惑わす。頂上部から右端を少しトリミングすることで花に集中できる。

2席の「春の岩稜」は、斜光線が岩盤の凹凸を浮き上がらせるなか、切り立つ柱状節理に自生するエゾムラサキツツジの開花を捉えた作品だ。芽吹き前のダケカンバや新緑の木立なども、厳しい環境をすみかにする植物のたくましい生命を描き出している。3席の「絶壁に生きる」は、大海に面した絶壁をすみかにする木々の遅い春を捉えた作品だ。静かに波立つ淡いブルーの海原を背に芽吹く樹木はミズナラだろうか。岩稜中ほどの掌状の葉の小さな木立はエゾイタヤか、赤花はヤマツツジか。柔らかな色合いの作品である。

鮫島和子賞の「静謐」は、次々に頭をもたげ、一塊に開花するヒトリシズカを捉えた作品である。斜め上からの光が花茎を黒く塗りつぶし、葉の中央に開花する花々にスポットライトを当てている。上から左下に流れる枯れ枝が画面に変化をもたらした。



生命（イノチ）
鈴木佳夫（岩見沢市）



張り込み
吉村剛（千歳市）



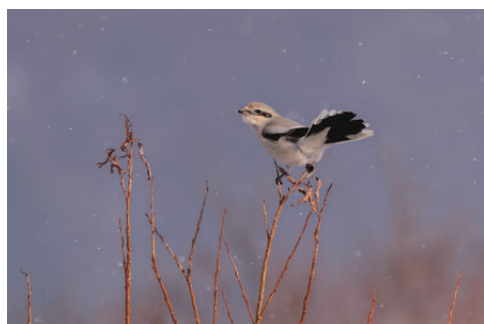
コミミズク 吹雪に飛ぶ
林恭郎（札幌市）



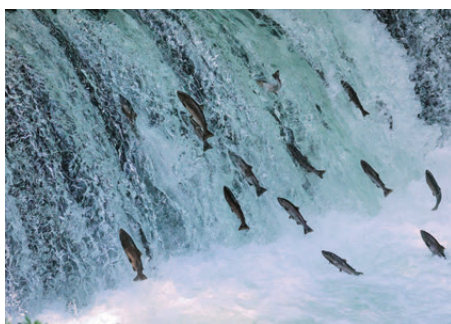
手のひらを太陽に
津山みづえ（富良野市）



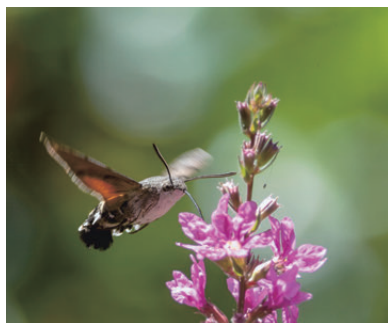
緑の宝石箱
高橋大樹（札幌市）



雪舞う高みの孤影
藤本卓哉（恵庭市）



チャレンジ
山谷守（釧路管内標茶町）



空中給水
森谷時男（江別市）



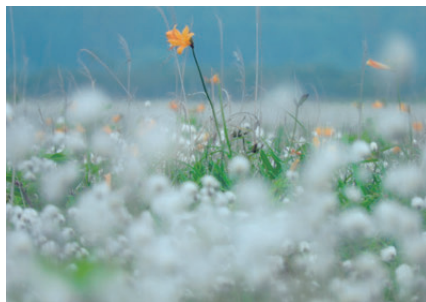
厳冬の滝登り
東海林勇（札幌市）



森のアクセント
今泉俊雄（釧路市）



高嶺の花
阿部孝志（江別市）



雲の上のごとく
糸賀一典（千葉県柏市）



クリンソウの咲く森
浅野晴也（釧路管内弟子屈町）



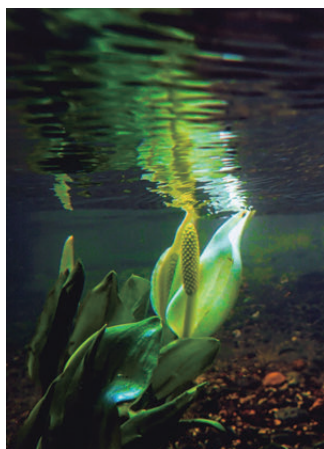
闇姫
渡部啓二（渡島管内七飯町）



ドレスアップ
東等和子（釧路市）



悠久の造形
竹田徹夫（渡島管内知内町）



春の水中花
鈴木佳夫（岩見沢市）



倒木更新
津山みづえ（富良野市）



歓喜の春
出口博司（帯広市）



氷華
村田浩一（十勝管内音更町）



Activities
Report

札幌の野生生物との共生をさっぽろラウンドウォークを歩いて知ろう・学ぼう 2025

NPO 法人ウォークラボ札幌

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

取り組む 人びと

[助成事業報告書より]

大都市札幌に出没する野生生物との共生のため、 出没や被害の状況、生態などの正しい情報と 適切な対応を歩きながら学ぼう。

札幌市は人口約197万人の大都市でありながら、市街地近くまで自然が広がり、ヒグマやエゾシカなど野生動物と人とが近い距離で暮らしています。一方で、市街地への野生動物の出没や農業被害が増加しており、正しい理解と適切な対応が求められています。

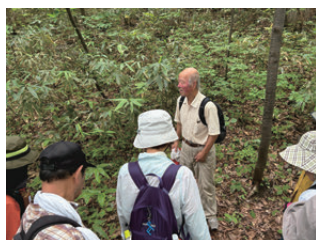
本事業では、人と野生動物の摩擦を減らすために、札幌の外周約140kmを結ぶ「さっぽろラウンドウォーク(SRW)」を活用し、専門家の解説を受けながら歩いて学ぶ体験型環境教育を実施しました。

実施概要

7月21日(月・祝)・真駒内駅・常盤橋付近、約8km



SRW 札幌の野生生物との共生イベントのチラシ



入林前の注意点の説明風景



ヒグマの頭骨を用いた生態の説明



クマスプレーの試射

講師・小川巖氏(エコ・ネットワーク代表)／参加者17名
9月6日(土)・宮の沢・西野市民の森(約6kmに変更)
講師・早稲田宏一氏(NPO法人EnVision環境保全事務所)／参加者18名
11月9日(日)・滝野すずらん公園付近(約7km予定) ※大雪のため中止
11月15日(土)・代替として座学を実施(小川巖氏)／参加者17名
合計3回実施(うち1回は座学)、延べ参加者数52名でした。

学習内容と特色

フィールドワークでは、ヒグマやエゾシカ、キツネなどの痕跡を確認しながら、ヒグマの餌となるミズナラ・オニグルミの識別や通り道の見分け方、開けた場所を嫌う習



ヒグマの好物・オニグルミ

性など、生態や行動を学びました。フン標本の観察・識別と感染症(エキノコックス)への注意、野外活動時の服装、蜂やダニへの対策などについて理解を深めました。座学では、ヒグマの行動特性や遭遇時の対応、クマスプレーの正しい使い方、エコ・ネットワーク制作の教育用DVDを視聴しました。

参加者は、「本来は臆病で人を避ける習性」などヒグマの生態をよく理解することで過度な恐怖感が抑制されたり、痕跡やフンの識別力を学び、感染症の正確な知識を得ることなど、人と野生動物の適切な距離を保つ意識が育まれました。

「自然と都市が隣り合う札幌」という環境を活かし、実際に現地を歩いて学ぶことで、人と野生生物の共生を具体的に体感できる本事業は、野生動物に関する断片的な報道や憶測ではなく、専門家の現場解説によって正確な理解を得られる貴重な機会となりました。

今後も、さっぽろラウンドウォークを活用した体験型環境教育の場として、札幌の自然と都市が共に存在できる地域づくりを推進していきます。



さっぽろラウンドウォークの紹介



かつてはあちこちで群生していたスズラン。 貴重な群生地で始めた 好環境を維持するための地道な活動。

なぜボランティア活動を始めたか？

スズランが札幌市の花に制定された1960年頃、スズランは郊外のあちこちで群生していましたが、今では自生地がほとんど見られなくなっていました。

他の地域でも同じ状況ですが、幸い平取町芽生の群生地は奇跡的に生き残り、5月下旬から6月上旬

の花期には可憐な花を咲かせ、多くの人が訪れる観光スポットとして知られるようになりました。

ところがスズランが成長する時期は、他の草本も同じく成長時期です。競争にさらされるため、他の草本の陰になってしまい、見えづらくなってしまう箇所が目立つようになりました。

この現象は十数年前から進行していて、改善のため町役場が音頭を取って町民参加による侵入草本を除去する活動が始まりました。

その状況を知ったエコ・ネットワークが中心となり市民参加型の環境ボランティアとして始めたのがこの活動のルーツと言えます。

参加者全員

今回の活動は札幌と小樽を中心とした市民参加型の環境ボランティアとして企画しました。当初はスズランの花期の少し前に1泊して2日間にわたって実施する計画でしたが、宿泊予定の国立日高青少年自然の家が学校利用の集中期であったため、作業は日帰りの

1日だけの実施に縮小しました。

群生地の位置と環境

この活動の対象群生地は平取町芽生に所在する町営の旧放牧野です。ここはかつて馬の放牧地として利用されていました。現在の群生地は約15haです。

群生地は、平坦な河岸段丘で本来であればハルニレ、ヤチダモ、ミズナラ等の広葉樹林になる環境ですが、放牧野として維持管理されてきただけにヤチダモ、シラカンバ、ヤナギ類が点在しているだけでスズランにとっては好適な環境といえます。一方、地表部に目を向けると、スズラン以外の草本が徐々に侵入する傾向にあります。

スズランとはどんな植物なのか

キジカクシ科に属する多年草。葉は2枚で長さ約20〜30cm、幅5〜6cm。公園や家庭の庭などに植えられているのは、ほとんどがドイツスズランで、在来スズラン

より大ぶりに上に花穂が葉の先端まで伸びる点で区別できます。

スズランを踏みつけないように行う侵入草本の抜き取り作業

25年5月20日。作業手順を説明後、作業を開始しました。場所は入口右側のメイン観賞歩道の右側としました。範囲は遊歩道から2mくらいを手入れする範囲と指示したもの、作業が進むにつれ数m、所によっては10m近くに及びました。

スズランの群生地に入るのだから踏みつけられないよう細心の注意を払いながらヨモギ、カラマツソウなどの侵入草本の抜き取り作業を始めました。抜き取るとは言え、単純に引き抜ける種類は少なく、特に多いヨモギは根が数十cmの長さになっていいることが多いため根を全部除去するのは、かなり面倒でした。一部でも残してしまうと翌年以降、そこから発芽してしまいます。

20人のボランティアが一丸と





なつて進めた結果、昼までにはかなりすっきりしてきました。スズランを踏みつけないように気配りしながらですから、楽とは言えない作業でした。

後日開催されたスズラン観賞会に便乗し、確認した活動の効果

今回の侵入草本の除去作業は群生地の一部でしたが、鑑賞に訪れる人たちがもつとも多く通る場所でした。それだけにその効果が大きい気になるところでしたが、折りよく活動の9日後の5月29日にスズラン群生地を訪れるイベントが開催されました。私たちもバスに便乗して現地に向かいました。

訪れた日は、平取町主催のスズラン観賞会の期間中で、多くの来場者が詰めかけていました。早速我々が作業したエリアを中心に観察しました。一言で言えば、抜き取りの効果は明らかでした。作業区域は余計な草本がほとんど見当たらないだけに、全体がすっきりしていました。個々のスズランも他の場所と比べて大きく育っているように見受けました。

非作業区域は侵入草本が、かなり大きくなっていた上に全体的に



平取町芽生すずらん群生地



作業の様子



開花直後のスズラン



侵入草本
①アキタブキ ②ヘビイチゴ
③ヨモギ ④ススキ

スズランが隠れてしまっていました。やはり当初から主要な侵入草本とみていたヨモギとカラマツソウが特に目立っていました。

参加者の声、感想

今回参加された方々に作業を通して感じたことを聞かせていただきました。

・この群生地には、前々から来たいと思っていたので、いい機会になりました。スズランの生育を助ける活動は一生の思い出になりそうです。

・スズランが本格的に開花する前で一面咲き誇る様子が見られませんでした。それでも早咲きのスズランが見られて感激しました。

・日本産のスズランなどもう何十年も見ていませんでしたが、こんな広大な群生地が残っていたなんて奇跡です。いつまでも続いて欲しいです。

・どんな活動なのかよくわからなまま参加したのですが、抜き取ると言っても大変手間がかかるのだと、よくわかりました。

・今回、町内の人たちと一緒にや

ると聞いていたのですが、実現できず残念でした。

・日本産のスズランをまだ見たことがなかったもので、見ることできてうれしいです。

・このボランティアに参加して、ある程度自信ができました。またどこかで別のボランティア活動があれば参加してみたいです。スズランを踏まないように作業をするので、結構気を使いました。ヨモギの根があんなに長く伸びているなんて、初めて知りました。

【活動概要】
・開催日/2025年5月20日
・定員/20名(実参加者20名)
・持ち物/シャベル、鎌などある人は持参。主催者も各種道具を用意。
・交通手段/貸切バスを使用
・参加費/3,000円(食事代を含む)
・作業時間/10:30~15:30(昼食・適宜休憩をとり)
・作業場所/平取町芽生スズラン群生地

大雪山系と日高山脈での快適な携帯トイレの使用環境を。 携帯トイレブースや回収ボックスの設置、トイレマップの 配布により山岳環境の改善に取り組む。

当会が発足した2000年ごろは、大雪山系、利尻山、羅臼岳などでは、登山者の排泄による汚物やティッシュの散乱、高山植物の踏み付けによる裸地の拡大など、目を覆う惨状でした。これを改善すべく25年間、取り組んできました。

私たちは改善のツールとして携帯トイレに着目しました。登山者に根気よく使用のお願いを続けてきました。トイレのない避難小屋や野営地には携帯トイレブース（以下、ブース）、登山口には携帯トイレ回収ボックス（以下、回収ボックス）を

設置し、携帯トイレの使用環境改善を行政に働きかけました。

大雪山系の取り組み

美瑛富士避難小屋では環境省が15年～19年にテント型ブースを設置して効果検証を実施しました。

維持管理は北海道の山岳9団体（美瑛富士トイレ管理連絡会）が交代してボランティアで担いました。その結果、環境省で固定式ブースを整備し、し尿の散乱は激減しました。現在も点検パトロールやブースの冬囲い、冬囲い外しを継続して実施しています。

トムラウシ南沼野営地にはブースが1基ありましたが、し尿の散乱は続きました。17年～19年に行政と山岳団体で「トムラウシ南沼汚名返上プロジェクト」を設立しました。改善に向け、現地で実態調査やアンケートを実施しました。その結果もう1基増設し、し尿の散乱は激減しました。

裏旭野営地にもトイレがありません。20年～21年に山岳18団体の賛同を得て、「裏旭野営指定地携帯トイレ検討連絡会」を設立し、分担して実態調査とアンケートを実施しました。22年3月に結果報告書として冊子にまとめて公表しました。環境省も23年と24年にブー



美瑛富士携帯トイレブース冬囲い作業



活動報告会模様





大雪山系と日高山脈のトイレ問題解決に向けた取り組み 山のトイレを考える会

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

スを設置して効果検証業務を実施、ブース設置が必要との結論となりました。ブース設置に向け行政に働きかけていますが、維持管理の予算確保が課題として残っています。

登山者への啓発活動にも長年取り組みました。山のトイレマップ

ルに散在している小規模テント場でのし尿の散乱状況を調査することになりました。日高山脈は難度の高い山ばかりで、残念ながらカムイエクウチカウシ山の調査のみとなりました。5カ所のテント場を調査し、携帯トイレ1個、ティッシュ1個を回収しました。



トイレマップ



日高山脈の取り組み

22年〜23年に14カ所の山小屋とトイレの実態を調査・公表しました。今年度は尾根や稜線及びカールに散在している小規模テント場でのし尿の散乱状況を調査することになりました。日高山脈は難度の高い山ばかりで、残念ながらカムイエクウチカウシ山の調査のみとなりました。5カ所のテント場を調査し、携帯トイレ1個、ティッシュ1個を回収しました。

活動報告会の開催

26年3月に札幌で25年度の活動報告会を22名の参加者を迎えて開催。大雪山と日高山脈のトイレ問題の現状と最新情報について報告、意見交換により課題を共有化しました。

日高山脈でも携帯トイレの使用を行政、山岳団体等にお願ひしています。今まで2カ所の登山口で回収ボックスが設置されていましたが、今年度はさらに3カ所が増えました。

日高山脈のトイレマップを新たに2000部制作しました。日高山脈山岳センター等の情報センター、山岳団体、行政などに配布しました。



活動報告会集合写真

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

トレイルカメラ(自動撮影カメラ)の設置による 出没状況の調査やワークシヨップなど、 滝川周辺に生息する身近な野生動物との共存を考える。

事業の目的

無人で稼働する自動撮影カメラを市内の林道脇の定点に設置し、野生動物モニタリングを実施しました。得られる情報を近隣住民と共有しながら、野生動物との軌跡回避を目指す取り組みです。

実施の様子

自治体の許諾を得て、滝川・赤平・深川の各市境界に近い林道に赤外線センサー付きの自動カメラを設置し、北海道滝川高校理科の長澤秀治・生物教諭(たきかわ環境フォーラム運営委員)に撮像データを解析していただきました。

クマとの軌跡が道内各地で顕著となった2025年、自然愛好家向けにクマ撃退スプレーの実践的トレーニングを初実施し、その模様をシヨート動画にまとめてウェブで公開しました。

12月には「たきかわエコフェスタ2025野生動物と共存する地域の力を育もう」を開催し、活動成



活動のようすを動画にまとめ、公開しています。http://ecoup.la.coocan.jp



「たきかわエコフェスタ」で基調講演する
山本牧さん(右)、報告する米内健二さん(左)



ワークショップで議論する
「たきかわエコフェスタ」参加者たち

果の共有と意見交換を図りました。

25年度・未来へつなぐ!北国のいきもの守りたい賞受賞

滝川市江部乙町19丁目林道(滝川市道)に2カ所計3機のカメラを設置し、9カ月にわたり定点観測を実施しました。

9月と10月には、市内の「川の科学館」を会場に「飛び出すエコカフェ」と称してクマ撃退スプレーのトレーニングを行ない、のべ約20人が参加。実物大パネルを使った臨場感ある体験が好評でした。

「たきかわエコフェスタ2025」には約60人が参加し、基調講演・報告・グループ討議を通じ理解と意識の共有化を深めました。

こうした取り組みが評価され、「25年度・未来へつなぐ!北国のいきもの守りたい賞(北海道生物多様性保全実践活動賞)」を受賞しました。次年度以降も市民レベルのモニタリングを継続し、情報共有と意見交換の場づくりを進めていく予定です。





カラスマニュアル制作に伴う行動調査やねぐら調査、マスコミ対応や講演会などの啓発活動まで、最も身近な野生動物・カラスに関する活動は多岐にわたる。



事業の狙い

当会は2017年からカラスマニュアルを作成しており、当初は自治体向けでしたが、現在は広く一般にも配布しています。カラスの生態を理解してもらい、より良い共存を目指すように活用していただけたらと思います。

内容

当初、この冊子は一般向けの配布目的ではなく自治体担当部署への配布でしたが、市民などからの希望も多く、現在は無料で配布し、施設などへ設置してもらっています。

実際に当会に寄せられた相談や調査記録に基づく内容を中心に作成しています。

カラスの相談は全国から寄せられており、3月下旬から7月中旬にかけて最も多く、そのほとんどが「繁殖期のカラスの行動」や「保護」に関するものです。繁殖期に向けて、自治体や市民のカラス対応の参考にして頂けるとより良い共存が可能と考えています。今後も改訂や追記をして発行したいと思っています。

当会の活動

当会の活動についてご報告します。25年5月に画廊喫茶で写真展を開催しました。期間中に紀伊國屋書店にて「札幌のカラスを語る」のトークショーを開き、約120名の方にご参加いただき大盛況でした。

日本鳥学会25年度札幌大会では「札幌圏の20年間に及ぶカラス類のねぐら状況と人との関わりについて」というタイトルで口頭発表を行ったほか、高校生企画の講師や自由集会での話題提供などにも参加いたしました。

円山動物園開催の「アースデイ」

にも参加をして、啓発活動を行いました。その際に「カラスマニュアル」を配布しています。アースデイではオリジナルグッズの販売を行い活動費に充当しています。オリジナルグッズの作成はボランティアの皆様がご提供いただきました。

25年8月には大阪でのイベントへの依頼があり、札幌のカラスの魅力についてお話ししました。その他に講師依頼もありカラスの基礎講座を開催いたしました。

26年3月1日には札幌市・NPO法人TSUNAGUとの共催で「カラスとヒグマとヒトとの交差点」というタイトルでトークショーを開



アースデイ (円山動物園)



札幌のカラスを語る (紀伊國屋書店札幌本店)

催し、餌付けが及ぼす影響について考えていただく提案をいたしました。意図的な餌付けと意図しない餌付けが存在していて、野生動物を引き寄せ、人との軋轢を生みだしているということを考えていただきました。他団体との共催イベントはこれからも継続して行きたいと思っています。

日々の活動として、カラスの定点行動調査、生息数を把握するためのねぐら調査、マスコミからの取材対応やラジオ出演などを通じ、啓発活動をいたしました。全国からカラスに関する相談も多く寄せられており、対応しています。他団体などからの話題提供や執筆依頼もありました。



尻別川のイトウ繁殖地「見まもり隊」活動 尻別川の未来を考えるオピラメの会

取り組む人びと

【助成事業のレポートより】

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。



イトウは日本列島最大級の淡水魚です。羊蹄山（マッカリスプリ）の北側の山麓を縁どるように流れる尻別川は、野生イトウの生息南限です。かつてイトウ釣り師たちが「メッカ」とも呼んで憧れた尻別川ですが、とりわけ1970～90年代の大規模な河川工事などの影響を受けてイトウは急激に数を減らし、文字通り「幻の魚」になってしまいました。

地元のイトウ釣り師たちに生態学者たちが加わった「オピラメの会」は、96年の発足以来、科学的・社会的なアプローチで、個体群の復元をめざしています。広大な流域内にわずかに残る貴重な自然繁殖地を保護するために、2011年から繁殖期に合わせて、ボランティアによる24時間体制の「見まもり隊」活動を続けています。

事業の目的

かつてはイトウのメッカと呼ばれた尻別川、いつしか「幻の魚」になってしまったイトウ。イトウ釣り愛好家や生態学者たちが個体群の復元を目指す。

お、「オピラメ」とは地元の釣り師たちが他の川のイトウと区別して尻別川のイトウを呼ぶ時の名前前で、アイヌ語でイトウのことを指す「オペライベ」という名に由来している、伝わっています。

実施の様子と、その成果

イトウの繁殖期にあたる春の融雪増水期にあわせ、倶知安町内の自然繁殖支流で、産卵のために尻別川本流から遡ってくる親魚のモニタリングと、侵入者（釣り人、撮影者など）による脅かし防止などを兼ねた「見まもり」活動を行いました。モ

ニタリングの結果によれば、今季の親魚初確認は25年4月18日（オス2尾）で、5月11日までの24日間に延べ47尾（オス35尾、メス12尾）、計10回の産卵行動を目視確認しました。

当会はこの見まもり隊活動を、河川管理者や地元自治体と協働しながら、11年から毎シーズン欠かさず実施しています。河川管理者から河川敷占有許可を得て、レンタルしたコンテナハウスと移動式トイレを設置し、ボランティアの見まもり隊員の滞在、また見学者への情報提供の拠点にしました。さらにパトロール省力化のために、

河畔に赤外線センサー付きの自動撮影カメラ2台を設置し、携帯電話回線経由の自動発報装置と組み合わせ、撮影映像をリアルタイムでモニターしました。

期間中の見まもり隊の出勤人数はのべ87人でした。また、地元の倶知安小学校および喜茂別小学校の児童による見学授業を含め、見学者の人数はのべ94人でした。この成果は当会発行のニュースレターに詳しく掲載しており、ウェブサイトで公開しています（<https://opiramesakurane.jp/index.html>）。



繁殖地の川岸に、イトウ保護を呼びかける看板を取り付ける



イトウ繁殖地を見学に訪れた地元小学生たちを案内する川村洋司事務局長



「見まもり隊」隊長の足立聡さん（右）と川村洋司事務局長



2025年シーズンの「見まもり隊」に加わったオピラメの会の会員・サポーターたち





ピットフォールトラップ調査(地上徘徊性昆虫)の回収作業

玄武岩溶岩がつくり出す風穴、 その周辺には独特な景観と植生が形成される。 次世代へ引き継ぎたいその特異な植生と風穴のメカニズム。

実施主体

十勝自然保護協会は1971年に設立されました。十勝の自然環境の保全、保護育成につとめ、生活と文化向上に貢献することを目的として活動しています。

今、力をいれている活動は、大雪山、日高山脈、阿寒摩周と、十勝を囲む国立公園の自然を守ることです。いずれにもその地域特有の貴重な自然があり、人間の開発行動から守り次世代に引き継いでいきたいと活動しています。

事業の目的

阿寒摩周国立公園阿寒富士西麓の森の貴重さはほとんど知られていませんでした。当会は、2017年頃から自然探索を始め、独特な地形、風穴の存在、その植生の特徴、景観のすばらしさを認識してきました。アカエゾマツを主体とする林内に、低標高でありながらイソツツジ、コケモモなど高山性の植物が繁茂し、蘚苔類も森林性のミズゴケ類が豊富で、凍土の存在が推測される地域です。これまで調査はほとんど行われておりませんでした。

22年に、佐藤謙氏(北海学園大学名誉教授)の植生調査、乙幡康之氏(ひがし大雪自然館学芸員)の蘚苔類調査に同行し、23年に事前調査をし、24年に、第2種特別地域を含む国有林で、風穴と風穴による低温湿潤な環境に依存した特殊な植生や蘚苔類の調査を3人の専門家(清水長正氏、指村奈穂子氏、乙幡康之氏)に依頼し、共に調査しました。



風穴の地温-0.2℃。真夏でも0℃近い地温でこの地域には凍土の存在が推測される

24年の調査

によって多くのことが見えてきました。

阿寒富士から流下した玄武

岩質溶岩による複数の凹地において低温環境が確認され、さらに冷風穴・温風穴が地下で通じている可能性もできました。風穴の低温と複雑な地形の狭い範囲内に多様な植物が生育している特徴があげられました。蘚苔類では、ゴレッツミズゴケなど北海道で希産種とされる種が3種確認され、うち2種は阿寒摩周国立公園では初確認種であることが報告されました。ここは極めて珍しい自然環境をもつ地域であるということが確認されました。

実施の様子

助成事業は下記の課題を中心に研究者と会員の協力を得て、延べ19日にわたり行いました。

・風穴(地形・気温地温・温風穴・清水

長正氏

・風穴周辺の森林植生…塚田晴朗氏
・ピットフォールトラップ調査

地上徘徊性甲虫…須田修氏

クモ類…松田まゆみ氏

ムカデ類およびヤスデ類…開澤菜月氏

両生類…乙幡康之氏

花粉分析による植生遷移…星野

フサ氏・萩原法子氏・春木雅寛氏

地層内の植物遺体…乙幡康之氏



風穴を含む凹地底部におけるコドラート調査



(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

【助成事業のレポートより】

国内最大級の繁殖地の島で ウミネコの営みや生態を、 子どもと大人が共に学べる絵本で再現。



利尻山とウミネコ

利尻島では、長年にわたりウミネコと人のあいだで軋轢が生じており、人為的な理由によってウミネコがけがをしたり、死亡する事例も見られます。一方、ウミネコは2019年に北海道の準絶滅危惧種に指定されており、近年その数の減少が懸念されています。利尻島のウミネコ繁殖地は国内最大級の規模を誇り、効果的な保全のために極めて重要な地域です。当会ではこれまで、講演会や報告会を通じて島民の理解を深める活動を行ってき

ましたが、子どもたちを対象とした取り組みは十分ではありませんでした。そこで今回、ウミネコの保全と共存の促進を目的として、利尻島のウミネコを主人公にした子ども向け絵本を制作しました。



ウミネコ調査に協力するやじま氏

25年5月にやじまさくら氏を利尻島に招き、ウミネココロニーでの繁殖の様子をスケッチしていただきました。ウミネコの繁殖期はおおむね4月から7月にかけてであるため、やじま氏の来島時以外の期間については、会のボランティアメンバーが随時写真や動画を撮影し、繁殖状況の記録・共有を行いました。繁殖期が落ち着いた秋頃からは、オンラインで絵本の構成を検討する作業に着手しました。当会にとって絵本制作は初めての試みであったため、構成検討の段階から幼稚園教諭やデザイン会社の方々にボランティアでご助言をいただきました。また、制作過



絵本の表紙

程では知人家族に試作版を配布し、子どもの理解度や保護者に

ある埼玉県所沢市の幼稚園にも配布を行いました。絵本を読んだ家族からは、「利尻島が日本最大のウミネコの繁殖地であることを初めて知った」「ウミネコの糞が栄養となっていることを初めて知った」「利尻島でのウミネコの暮らしが分かり興味深かった」など、多くのポジティブな感想が寄せられました。一方で、印刷部数が限られていたため、すべての希望者に配布することはできませんでした。今後は資金の確保を図り、増刷を行うことで、より多くの施設および家庭への普及を目指しています。



読み聞かせの様子





浜中町における酪農学園大学学生とのワークショップ

道内の中高校生や大学生向けの 生物多様性保全・英語版テキストの制作と 留学生が参加するワークショップ開催。

はじめに

国際交流サークル SukaRela は、2006年に酪農学園大学に創立された国際交流と自然環境の保全を目的とした学生サークルです。語学を習得したいという学生から海外で自然環境の保全に取り組みたい学生、将来海外で働きたいという学生まで、様々な動機を持ったメンバーで構成されています。酪農学園大学は、26年4月現在、24カ国・45機関との間で協定を結

北海道の
生物多様性保全テキスト江別市とわの森三愛高校での
ワークショップせたな町北檜山中学校での
ワークショップ

び、多くの留学生が学んでいます。

酪農学園大学に来られる留学生のうち、特にマレーシアのサバ大学とは関係が深く、11年には学術交流協定を締結し、学生及び教員の交流を続けています。

サバ大学からの留学生は、生物多様性の保全を学ぶ学生たちが多く、毎年6カ月間のインターンシップ研修を行っています。25年度も5人の学生が来学しました。

生物多様性保全テキストブックの作成

サバ大学の留学生と協働して、北海道の中高校生や大学生向けの北海道の生物多様性保全の英語版テキストを作成しました。

内容は、北海道の地理・気候の概

要、植生、河川、湿地、海洋、山岳の特徴を解説し、生物多様性の重要性について、またアイヌの人たちの自然資源の活用についても解説しました。さらに、北海道の絶滅危惧種、地域の生物多様性に対する脅威、保全活動を紹介しています。

中高生・大学生とのワークショップ

北海道の各地を訪問し、日本とマレーシアの自然と文化に関するワークショップを英語で行いました。訪問地は、江別市(酪農学園大学、とわの森三愛高校)、せたな町(北檜山中学校、羅臼町(羅臼高校)、浜中町(霧多布湿原/酪農学園大学の学生とのワー

ショップ)などです。

まとめ

テキストは北海道の中高校生や大学生が北海道の自然や生物について英語で紹介する際の手引きになったと思います。また、ワークショップを通じ、留学生たちがマレーシアの自然と文化を紹介し、北海道の気候を比較し、両地域の生物多様性の違いを分かりやすく、英語で解説してくれたことにより、気候の違いが地域の生態系や生物種にどのような影響を与えるかを示し、気候変動問題や生物多様性保全の重要性に対する理解を深めることができたと思います。



道内の9園館の連携でバラエティ豊かなイベントが魅力。 多角的な普及啓発で、北海道の自然環境を次世代につなぎます。

(2025年6月～26年3月)

北海道産いきもの保全プロジェクトは、北海道内の9つの動物園・水族館が連携し、道内に生息する野生動物の保全や調査研究、教育普及を進める共同事業です。傷病鳥獣への対応、飼育下繁殖や遺伝的多様性の確保のほか、各園館が協力して野生動物に関する情報共有や啓発活動を行い、地域と自然が共に生きる社会づくりを目指しています。本年度は3つの事業を実施しました。

第19回アースデイ in 円山動物園 (2025年6月21日・22日)

北海道産いきもの保全プロジェクトとしては初めての出展となったアースデイでは、各園館が個性豊かなワークショップを展開しました。AOAOSAPPROの「おさかな帽子づくり」、千歳水族館の「サケ皮しおり」、釧路市動物園の「生態系ジェンガ」、登別マリパークニクスと円山動物園による「動物ベーパークラフト」など、来園者が体験を通して楽しく学べる内容でした。



ブース全体の様子

生態系ジェンガ
(釧路市動物園提供)
の様子

また、NHK札幌放送局の協力によるヒグマVR体験も実施され、2日間で353人が体験。多くの市民が北海道の自然についての学びを深めました。当日は募金活動も行い、合計72,601円の支援をいただきました。園館職員や学生ボランティアが協力し合い、プロジェクトとしての一体感が生まれたイベントとなりました。

あにまる・ハッピー・マーケット in 旭山動物園 (2025年9月20日・21日)
3年連続の出展となり、プロジェクトの認知度が大きく向上しました。



手前が募金ブース、奥がワークショップブース



エゾシカ皮チャームを作ろう! の様子

た。「チリモンを探せ!」「エゾシカ皮チャームづくり」「動物の食べ方を知ろう!」など、楽しみながら学べるプログラムが多く、来園者に好評でした。また、加盟園館の紹介や動物クイズを通して、各施設の特色を伝える情報発信も行いました。

募金は合計66,988円となり、来場者からの温かい支援が寄せられました。円山・旭山両園だけでなく、道内各地の園館にも関心を持ってもらうきっかけづくりが今後の課題として挙げられました。

猛禽類医学研究所×北海道産いきもの保全プロジェクト
「羽根で学ぶ、鳥のこと。With ZOO & Aquarium」

小樽水族館では「北海道沿岸の海鳥」、旭山動物園では「夏鳥」、円山動物園では「冬鳥」など、多彩な切り口で構成されました。

釧路市動物園ではInstagramライブ配信を通じたオンライン解説、AOAOSAPPROでは研究員によるトークイベントも実施。羽根の構造や種類、鳥類の生態について専門的な知見が紹介されました。展示に使用された羽根はすべてロードキル等で失われた野鳥の個体から提供されたもので、人の暮らしと野生生物の関わりを考える契機になりました。およそ30万人を超える来園者がこの展示を訪れ、羽根一枚から自然と人とのつながりについて深く学ぶ機会となりました。

初めての域内保全団体とのコラボ企画として、猛禽類医学研究所と協働した巡回展示を道内9園館で開催しました。各園館の地域特性や生息環境に合わせてテーマを設定し、釧路市動物園では「釧路湿原の鳥類」、





赤岩展望台



海洋プラワークショップ



浜遊び



野鳥の雛

**島全域が鳥獣保護区の天売島で、心を動かされる命の営みの
厳しさや、繁殖のための仕組みを親子で観察体験。**

2025年7月26日、27日の2日間、羽幌町の天売島において、親子を対象とした自然体験活動が実施されました。主に旭川市から参加した5組17名(大人9名、子ども8名)が、島の豊かな自然環境と野生生物とのふれあいを通じて、生態系や生物多様性への理解を深めることを目的として活動を行いました。

赤岩展望台では海鳥の観察を実施し、天売島に生息するウミガラスやウトウなどの生態について理解を深めました。また、黒崎海岸では海岸生物の観察を行い、専門ガイドの解説のもと、潮間帯に生息する生き物の特徴や役割について学習しました。そのほか、自然素材を活用した体験活動や、活動の振り返りを行い、学びの共有を図りました。

人口約240人の小さな島、天売島には、毎年約100万羽の海鳥たちが繁殖のために集まります。断崖に巣をつくるウミウやケイマフ



AOAO SAPPORO
「綺麗で個性豊かな羽をもつ鳥類」



釧路市動物園
「釧路湿原に生息する鳥類」



新さっぽろサンピアザ水族館
「北海道の沖合に生息する海鳥」

2025年度は、道の動物園・水族館が連携して多角的な普及啓発を展開し、野生動物保全の重要性を多く

の人に発信できた一年でした。各園館がそれぞれの強みを活かしつつ、一体となって活動を進めることで、北海道の自然を次世代へ受け継ぐ取り組みが一層広がっています。

時には命を落とした雛の姿に立ち止まり、自然の過酷さを受け止める場面も。講師の寺沢孝毅さんからは、現在の人間の暮らしがいかにか地球環境に影響を与えているか、また海鳥たちにもその影響が及んでいることが伝えられ、子どもたちは目を丸くして話に聞き入っていました。

海辺では雨の中でも海遊びを楽しみ、カニや貝、海藻、漂着物を観察。卵を抱えたカニに出会い、宝探しのように拾った貝殻について、後で図鑑を使って調べた姿も見られました。こうした経験は、ただ「楽しかった」で終わらず、自分の暮らしと自然が繋がっているという実感を育むものと思われま

天売島での2日間の体験を通じて、参加した親子は自然保護への関心を高め、生物多様性の大切さを実感する貴重な機会となったのではないのでしょうか。

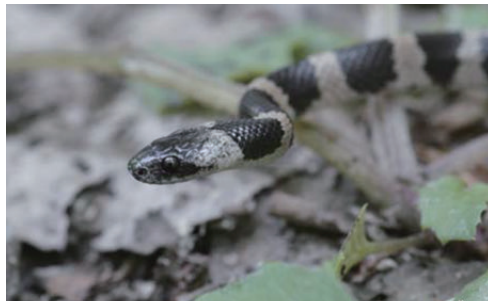
集合写真(フェリー前)



根付き始めた道民参加型の調査活動、 爬虫類・両生類の生息状況の一斉調査・ハープソンは 北海道の自然界の異変をいち早く察知する「物差し」。



札幌市内にて、ニホンカナヘビを見つけて観察を試みる



2025 年期間内調査で確認された種：21 種（昨年比 +3）

ヒガシニホントカゲ / ニホンカナヘビ / コモチカナヘビ / ジムグリ / アオダイショウ / シマヘビ
シロマダラ / ニホンマムシ / ニホンイシガメ / クサガメ / ミシシippアカミミガメ / アオウミガメ
エゾサンショウウオ / キタサンショウウオ / ヒガシニホンアマガエル / エゾアカガエル
アズマヒキガエル / ウシガエル / ツチガエル / トウキョウドルマガエル / トノサマガエル
※写真はヒガシニホンアマガエルの変異個体(本来は緑色)とシロマダラ

北海道に生息する爬虫類・両生類の分布や生息に対する理解を広め、生息環境の保護・保全の基礎資料とすることを目指しています。また、こうした記録を長期にわたって積み重ねていくことで、野生の爬虫類・両生類の生息状況を把握し、将来的な環境保護や保全活動に資する基盤を提供します。

「ハープソン Hokkaido2025」は、2025 年 4 月 1 日から 9 月 15 日の期間で実施されました。参加者は各自で野外の爬虫類や両

ハープソン（一般参加型爬虫類・両生類分布一斉調査）の実施目的は、道民が身近な両生類や爬虫類を観察し、親しむ機会を創出することにあります。

本事業では、道内各地から寄せられる観察情報を集約し、最新の分布マップを作成します。得られた知見は学術的な価値を持つだけでなく、研究会大会での発表や報告書の発行を通じて広く社会に還元されます。





道民参加型・道内爬虫類両生類分布一斉調査事業 (ハーブソン Hokkaido2025) 北海道爬虫両棲類研究会

Activities Report

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

生類を観察し、そのデータを当研究会へと提出しました。これらの情報を活用した生息マップの作成に加え、21年から25年までの調査結果を統合し、「ハーブソン Hokkaido2021-2025 結果報告書」を作成しました。

実施に際しては、SNSや会員ネットワーク、過去の参加者への呼びかけを通じて広く参加を募りました。参加者の居住地は札幌市などの人口集中域に多い傾向がありますが、実際の調査地点は道内全域の幅広い地域にわたり、広域的な分布状況を確認することができました。

21年から25年の調査には、のべ103チーム、合計310名が参加しました(25年単年では29チーム124名)。参加者層は10歳未満から80代までと非常に幅広く、北海道を10km四方で区切った2次メッシュで484区画(25年単年では251区画)において調査が行われました。

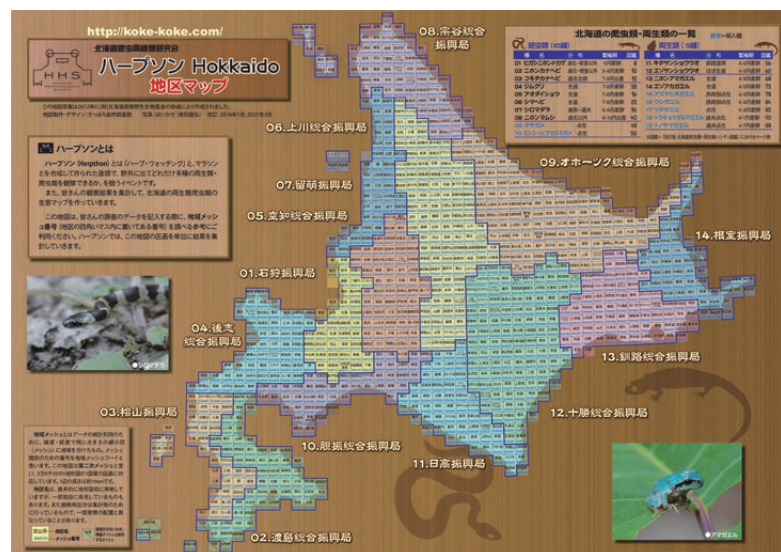
成果・結果

本事業の成果は、市民参加型の調査として定着し、年々データ蓄積量が増大していることです。確認データ数は、15〜17年の638

件、18〜20年の1,136件から大幅に増加し、今回の5年間では3,381件に達しました。12年の開始以来、知名度が徐々に向上し、一部の参加者が例年継続して参画していることから、本活動が季節のイベントとして根付きつつある

ことがうかがえます。

集まったデータの数は、単なる分布情報に留まらず、在来種の現在の生息状況や外来種の分布推移を検討できる規模となっており、生物分布の基礎資料として極めて有用です。多くの参加者の協力に



ハーブソン Hokkaido の調査マップ



宗谷地方の海岸付近で、トカゲ類を探して調査を行う

よって、地域の自然環境の現状を把握する貴重な資料を作成することができました。今後、北海道の自然界に変化が生じた際、その異変をいち早く察知できる「物差し」としてこの報告書を活用してもらいたいです。

人間活動や生態系の変化など、さまざまな理由で拡大した 特定外来生物※オオハングンソウ。開花状況調査から 種の特性の把握まで、手さぐりで始めた防除と活用の試み。

※特定外来生物：人間の活動によって海外などから入ってきた外来生物のうち、生態系や人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼす、またはそのおそれがあるものとして国が指定した生物。



特定外来生物セイヨウオオマルハナバチの防除と在来マルハナバチ類のモニタリングを活動の中心としている当団体では、マルハナバチ開散期や開花期等適期に特定外来生物オオハングンソウの分布把握と防除手法の確立も検討しています。（オオハングンソウは明治時代中期に観賞用として持ち込まれ、セイヨウオオマルハナバチは農業用ハウス栽培作物の授粉用として1990年代初頭に輸入され始めました。その後逸出し、野生化したため現在はいずれも特定外来生物に指定されています。）

付帯設備の観察（夏・秋）、地元官庁への聞き取り（冬）等を行いました。オオハングンソウの防除（抜取り）着手は、当団体のモニタリングエリア内の観察植物群落に侵入が始まったことや、山林側の在来種オ

ウバユリが明らかに減り丈も低くなったことなど、植生がオオハングンソウへ一気に置き換わりそのような状態になったためです。原因はオオハングンソウ自身の旺盛な増殖能力に加えて、周辺の

現地での防除試行、関係者へのアプローチ、事例視察といったフィールド活動を中心に実施しました。具体的には、他団体の公園内林床植生保全への取組見学と交流（6月29日、旭川市神楽岡公園）、十勝岳連峰周辺山麓の道路周辺でのオオハングンソウ開花状況調査と開花確認日の展示用マッピング、レク休養施設管理者への聞き取りおよび活動PR（10月4日、旭川市21世紀の森）、道路維持管理作業の見学と

付帯設備の観察（夏・秋）、地元官庁への聞き取り（冬）等を行いました。オオハングンソウの防除（抜取り）着手は、当団体のモニタリングエリア内の観察植物群落に侵入が始まったことや、山林側の在来種オ

ウバユリが明らかに減り丈も低くなったことなど、植生がオオハングンソウへ一気に置き換わりそのような状態になったためです。原因はオオハングンソウ自身の旺盛な増殖能力に加えて、周辺の

オオウバユリについては、林縁でふつうにみられる高茎草本でしたが、一昨年から明らかに減少しています。残った株も草丈が低くなり、花も矮小となりました。林縁側のオオハングンソウ根の掘り取りを行った際に、縮小した球根が横から出てきたのを確認しました。オオハングンソウは道路法



十勝岳連峰（表大雪側）周辺山麓の道路周辺でオオハングンソウの開花調査をもとに制作した開花確認日を記した展示用マップ

本（カンパ類）や草本（オオイタドリやセリ科高茎草）が植物食昆虫（コガネムシ、アブラムシ）の大量発生により成長抑制された影響も看過できません。観察植物群落内に飛び火的に入ったオオハングンソウの開花茎は夏・秋にかけて毎週定期的に行いましたが、次回までに伸び、丈が低くなりながら開花蕾まで付けるのが数回にわたって観察されました。10月に入って道具を手鋸に持ち

換えて根を掘取った後は伸びなくなりしましたが、日照時間や低温の影響もありそうです。この群落はマルハナバチの観察重点でもあり、次年へ観察を継続します。オオウバユリについては、林縁でふつうにみられる高茎草本でしたが、一昨年から明らかに減少しています。残った株も草丈が低くなり、花も矮小となりました。林縁側のオオハングンソウ根の掘り取りを行った際に、縮小した球根が横から出てきたのを確認しました。オオハングンソウは道路法



大雪山麓における特定外来生物オオハングソウの分布と防除に関する取り組み 大雪山マルハナバチ市民ネットワーク 美瑛部

(公財)北海道新聞野生生物基金は、皆さまからのご寄付をこの活動に助成しました。

重点的に行いました。マルハナバチの登山道モニタリング(25年6〜9月・12回実施)前後の機会を活用し、登山口付近や山岳道路沿いの初期侵入の抜き取りを行いました。

また、開花時期の花色が目につく森林内への侵入状況まで確認できたため、初期侵入分について優先実施しました。具体的には次の三事例になります。

① 遊歩道入口周辺に株が入った事例

② 溪流工作物周辺での水分土壤に生えている事例

③ 山岳道路沿いの柳等2次林床に生えている事例



継続観察植物群落に入ってきたオオハングソウ



オオハングソウの根張りの横で縮小したと見られる球根



カンバやオオイタドリで大発生中のコガネムシ類

の対応が望まれますが、山岳道路の冬季閉鎖に間に合わず持ち越しとなりました。森林管理署より国有林分内は外来種防除でも入林届が必要と指導を受け、①②いずれも手続を行いました。

オオハングソウを手で扱ってみると、虫食いが見られず、棘もなく、粘着もないため、素手でもさほど抵抗感はありません。なるほど防除活動の対象にされるほど素人にも取り組みやすい植物のように思います。虫ばかりでなく動物も食わないようで、食痕も見かけません。エゾシカが食べないと聞いて

たことがあり、この性質を有用資材として活かさないか、無い知恵を絞るより近郊に出かけてみました。旭山動物園の飼育係からは「ヒグマも食べない」「自分たちの知る範囲でオオハングソウを忌避剤になどの資材化の相談を受けたことはない」という情報を得ました。ホームセンターで扱っている鳥獣用忌避剤商品は、見たところ木酢液などの木質由来のようです。

厚紙のようなものにならないかやってみました。植物本体(茎葉)をハサミで細かく裁断し、すりこ木で潰し、水中で漉きましたが、オ

オハングソウ100%ではバラバラになってしまいます。また水で漉くと成分(汁)が流れ出てしまいます。そこで、新聞広告誌に掲載されていた紙漉き工房「エゾ和紙コース」のワークショップを体験しました。草本を部分的に採用した和紙づくりの行程は繊細なもので、外来植物や刈草などの廃棄物再利用的な発想ではないことがわかりましたが、木質材料の重要性についてなど参考になりました。

妙案はまだ出ませんが、今後の活動の中で、忌避資材化も頭の隅に置いて、機会を待ちたいものです。

8月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市中央区、匿名の方は1万円 ●札幌市東区、藤懸博史さんは3千円、匿名の方は1万円 ●札幌市白石区、佐藤研一さんは1万円 ●釧路市、匿名の方は1万5千円、匿名の方は5千円、匿名の方は3千円 ●川上郡弟子屈町、磯貝高士さんは1万円 ●茨城県水戸市、佐藤紘一さんは1万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

9月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市中央区、匿名の方は5千円 ●札幌市中央区大通東4、北海道新聞制作局運行センター「募金箱」に集まった3千円 ●北海道新聞野生生物基金のネイチャーフォーラム2025「募金箱」に集まった6,417円 ●札幌市東区、大淵武雄さんは2千円 ●札幌市南区、安部文子さんは1万円、匿名の方は5千円 ●札幌市西区、匿名の方は1万7,600円、匿名の方は5千円 ●札幌市厚別区、匿名の方は1万円 ●札幌市手稲区、竹中邦博さんは5千円 ●旭川市、匿名の方は7千円、匿名の方は5千円 ●滝川市、匿名の方は1万4,300円 ●江別市、匿名の方は1万円 ●恵庭市、匿名の方は1万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した ●札幌市中央区、日本動物園水族館協会北海道地区は7月26、27日に札幌豊平区大和ハウスプレミストドームで開催した「環境広場さっぽろ2025」の「北海道産いきもの保全プロジェクト」募金箱に集まった8,021円を寄付した。

10月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市中央区大通東4、道新会札幌八日会は募金に集まった4万7,347円 ●札幌市中央区大通東4、北海道マラソン組織委員会は「北海道マラソンの参加料と会場でのチャリティ募金」に集まった170万円 ●札幌市北区、匿名の方は2千円 ●札幌市南区、匿名の方は2万円 ●旭川市、匿名の方は5千円 ●釧路市、匿名の方2人はそれぞれ3千円 ●江別市、秋山みゆきさんは5千円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

11月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市中央区、大丸札幌店はレジ袋の収益金10万5,429円 ●札幌市白石区、シビテックは自社オリジナルカレンダーの売上金1万7千円 ●札幌市北区、匿名の方は3万円、匿名の方は5千円 ●札幌市中央区、匿名の方は5千円、匿名の方は4万円 ●北海道野生生物写真コンテスト作品展会場の募金箱に集まった1万6,901円 ●札幌市白石区、川畑寿美子さんは1万円 ●函館市、坂野美津子さんは3万円 ●釧路市、匿名の方は3千円 ●富良野市、大倉和江さんは1万円 ●石狩市、向野文彦さんは1万円 ●川上郡弟子屈町、磯貝高士さんは1万円 ●河西郡中札内村、吉田眞弓さんは3万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

12月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市中央区、匿名の方は2万円、匿名の方は1万円、匿名の方は5千円、匿名の方は3千円 ●札幌市南区、小堀煌治さんは5千円 ●札幌市手稲区、竹中邦博さん、高橋義一さんはそれぞれ5千円、柳川大地さんはナキウサギ保護のため2万円 ●札幌市清田区、上ヶ島精一さんは3千円、匿名の方は1万円、金江大次さんは1万円、金江久恵さん、金江明彦さんはそれぞれ5千円 ●函館市、山口精次さん、匿名の方はそれぞれ5千円 ●札幌市北区、吉田正さん、匿名の方はそれぞれ1万円、山田克彦さんは5万円 ●札幌市豊平区、二本柳貴夫さんは3千円 ●札幌市豊平区、かわうそ倶楽部は3,333円 ●北広島市、匿名の方は3千円 ●千歳市、後藤孝雄さんは2万5千円 ●札幌市厚別区、匿名の方は5千円 ●千葉県、平田正五郎さんは5千円 ●旭川市、匿名の方2人はそれぞれ3千円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2026年1月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●伊達市、匿名の方は5千円 ●大阪市、阪急阪神百貨店阪急うめだ本店は「秋の北海道物産大会チャリティ缶バッジ作り募金」に集まった14万8,680円 ●札幌市豊平区、匿名の方は1万円 ●釧路市、匿名の方は4千円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

2月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市、荒島さんは1万7千円 ●北広島市、匿名の方は1万円 ●江別市、水島末記さんは5,291円 ●苫小牧市、中西清隆さんは1万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

3月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●北見市、網野美江子さんは5千円 ●札幌市南区、匿名の方は1万円 ●札幌市東区、藤懸博史さんは1万円 ●札幌市中央区大通東4、北海道新聞社共栄会は50万円 ●札幌市中央区北1西3、札幌国際プラザ・コンベンションビュローは1万4,982円 ●札幌市中央区北5西2、札幌駅総合開発は募金箱に集まった11万9,763円 ●札幌市中央区、日本動物園水族館協会北海道地区は北海道の動物園・水族館内の「北海道産いきもの保全プロジェクト」募金箱に集まった8万2,453円 ●石狩市、笹川孝子さんは1万円 ●釧路市、匿名の方は3千円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

4月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●神戸市、畠中愛さんは9千円 ●札幌市中央区、匿名の方は3千円 ●札幌市豊平区、かわうそ倶楽部は3,333円、匿名の方は1万円 ●川上郡弟子屈町、磯貝高士さんは1万円 ●釧路市、水野敏幸さんは1万円 ●川崎市、斉藤政彦さんは2万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

ご支援ありがとうございます。

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金は、多くの企業や個人のみなさまの温かいご支援に支えられています。定期的に寄付をくださる方、記念日に合わせてご支援くださる方、「ナキウサギやフクロウを守ってほしい」との思いを託してくださる方、そして年会費を納めてくださるサポート企業のみなさま。また、大丸札幌店さまからはオリジナルエコバッグの収益金を、製菓会社「もりもと」さまからは「北海道バターサブレ 北ふく郎」の売上の一部を継続的にご寄付いただいております。そのひとつひとつのお気持ちが、北海道の豊かな自然と、そこに息づく生きものたちの未来につながっています。これからも、ともにこの自然を見守り、育んでいければ幸いです。

当基金を支援して下さるサポート企業のみなさま(申込順)

趣旨にご賛同いただき、継続的にご支援くださるサポート企業のみなさまに心より感謝申し上げます。サポート企業のご登録は随時受け付けております。年会費は1口3万円、口数に上限はございません。北海道の自然や生きものたちの未来を守る活動に関心をお持ちの企業のみなさまからのお申込みをお待ちしております。(2026年6月現在、22企業)

カネカ北海道 札幌市中央区北2条西3丁目1-20 札幌フコク生命越山ビル13階	運河の宿 おたる ふる川 小樽市色内1丁目2-15	北海道コカ・コーラ ボトリング 札幌市清田区清田1条1丁目2番1号	新倉屋 小樽市花園1丁目3番1号
ツルハ 札幌市東区北24条東20丁目1番21号	北海道新聞 HotMedia 札幌市中央区大通東4丁目1番地	アイワード 札幌市中央区北3条東5丁目5-91	ウヤマエンジニアリング 札幌市北区新川4条17丁目1-1
道新アクセス 札幌市中央区大通東4丁目1番地	網走信用金庫 網走市南4条西1丁目8番地	道新総合印刷 北広島市大曲工業団地8丁目2-1	遠軽信用金庫 紋別郡遠軽町大通南1丁目1-15
日本ハム 大阪市北区梅田二丁目4番9号 ブリーゼタワー	太田硝子店 旭川市永山3条5丁目1番2号	セコマ 札幌市中央区南9条西5丁目421番地	道新文化事業社 札幌市中央区大通東4丁目1 北海道新聞ビル6階
エフエム北海道 札幌市中央区北1条西2丁目 札幌時計台ビル14F	道新販売センター 札幌市厚別区青葉町6丁目1-33	道新サービスセンター 札幌市中央区大通西18丁目1-30 道新西ビル	ニコンシステム 神奈川県横浜市区西区みなとみらい3-3-3 横浜コネクタスクエア8階
山田商会 東京都中央区銀座西8丁目10番	キャノン マーケティングジャパン 東京都港区港南2-16-6		

本欄は、2025年5月～2026年4月の間に当基金へご寄付くださった方々のうち、北海道新聞紙上に掲載された方々を再掲したものです。また、掲載を希望されなかった方々からも多くのご支援をいただいております。

2025年5月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市白石区、匿名の方は1万円 ●札幌市豊平区、我妻陽子さん、匿名の方はそれぞれ1万円 ●釧路市、匿名の方は3千円 ●中標津町、匿名の方は3千円 ●札幌市西区発寒9の9、環境テクニカルサービスは道新野生生物基金制作の「花のエコ・イラスト百撰」を使用した協賛金として5万円 ●神奈川県川崎市、斉藤政彦さんは1万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

6月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●札幌市厚別区、匿名の方は1万円 ●札幌市手稲区、柳内風さんはフクロウ保護のため2万円、匿名の方は3万円 ●釧路市、今泉俊雄さんは1万円、水野敏幸さんは5千円、匿名の方は3千円 ●札幌市西区福井1、北海道コンクリート圧送協同組合は2万円 ●苫小牧市、正木由紀さんは5千円 ●石狩市、株式会社アバンテは5,291円 ●ニセコ町、Prabhakaran Anushaさんは1万582円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

7月

●埼玉県所沢市、石川都矢子さんは千円 ●北海道新聞野生生物基金のネイチャーフォーラム会場の募金箱に集まった1万6,854円 ●札幌市北区、匿名の方は5千円 ●旭川市金星町1、国際ソロプチミスト旭川は3万円 ●旭川市、山本由莉香さんは5千円 ●遠軽町、匿名の方は3万円 ●千歳市千代田町、製菓会社「もりもと」はサブレ「北ふく郎」の売上金の一部1万円を、いずれも北海道の自然と野生生物を守るために寄付した。

公益目的事業（一般会計）

助成事業

北海道の自然保護、野生生物保全に尽力する団体・個人の活動を支援している。2026年度は「一般助成」として8団体に計182万円、「杉本とき鳥類保護助成」として3団体に計60万円を決定した。また、道内の動物園・水族館9園が展開する「北海道産いきもの保全プロジェクト」への寄付分として同プロジェクト事務局に60万円を助成し、総額は302万円となった。

一般助成

●釧路市・元永康誠「ロードキル把握のネットワーク構築に向けたシステム作成と運用」20万円 ●札幌市・盤渓癒しの里山づくりプロジェクト委員会「自然共生サイト認定への取り組み」30万円 ●札幌市・北海道自然保護協会「市民ボランティアと行う札幌市円山公園での外来植物除去活動」25万円 ●樺山管内厚沢部町・北方ブナ園自然調査グループ「ブナの森でコウモリ探そ!」20万円 ●札幌市・NPO法人EnVision環境保全事務所「雨竜沼湿原の花をエゾシカから守る市民保全活動」27万円▽札幌市・手稲さと川探検隊「自然体験×IT:北海道スマート昆虫キッズ育成事業」20万円 ●小樽市・自然教育促進会「ヒグマとともに～環境出前教室～」20万円 ●札幌市・小グマフォーラム実行委員会「『ネイチャーポジティブな地域づくり』と市民による『小さなヒグマ対策』」20万円

杉本とき鳥類保護助成

●留萌管内天塩町・河瀬克英「野生傷病鳥獣保護リハビリ事業」18万円 ●札幌市・NPO法人札幌カラス研究会「身近な野鳥であるカラスとの共存・カラス対応マニュアル～北海道版2027改訂～」17万円 ●宗谷管内利尻町・利尻島ウミネココロニーについて考える会「利尻島における外来哺乳類の根絶と道北カモメ類繁殖地保全プロジェクト」25万円

普及啓発事業

シンポジウム・フォーラム

2025年度は「カムイの生命と大地」「寒さが守るこの星の生命～天売島から始まった世界“海”紀行～」の2回を開催し、参加者から高い評価を得た。講師による現場の知見や映像紹介は、北海道の自然と野生生物の魅力を再認識する機会となり、参加者から寄付が寄せられるなど、啓発効果もみられた。2026年度も地域の自然・生態系・研究活動をテーマとし、DO-BOX EASTを中心に開催を継続する。開演前にはスライド映像で基金の活動紹介を行い、認知度向上を図る。引き続き魅力ある内容を企画していく。

自然体験活動事業

自然・環境出前講座

2025年度は天売島「子ども海鳥塾」、由仁町高齢者大学「アカデミア・ユニ」で講座を実施し、タンチョウや海鳥等の希少種の生態理解を深め、人と野生の共生意識を高めた。2026年度も継続実施を目指す。

環境エクスカースション

2025年度は札幌市南区で「ヒグマスタディーツアー」を開催し、参加者がフィールド観察を通じて野生動物との適切な距離の取り方を学ぶ機会とした。道内各地で野生動物と人との関係が課題となる中、こうした体験学習の社会的意義は大きい。2026年度も開催を検討する。

モーリーの森づくり

2006年度から当別町「道民の森」、2012年度からは栗山町で植樹・種採取・苗づくり等を実施してきた。栗山町の協力により借用期限が延長され、2025年度は保育作業を進めた。必要に応じ、2026年度も作業を継続する。

コンテスト事業

写真コンテスト

第31回は応募者・応募点数ともに前年を上回り、内容・水準ともに充実した回となった。新設したU30(30歳以下)部門では10歳の小学生が受賞するなど、若い世代への広がりもみられた。2026年度も引き続きPR活動に力を入れ、カメラ量販店でのチラシ配布や道内の高校・大学への案内などを行う。9月の審査会で入賞・入選作を選考し、北海道新聞紙上、基金ホームページ、モーリー通信などで紹介する。また、秋には富士フィルムフォトサロン札幌で写真展を開催する。※写真コンテストは毎年8月上旬から20日ごろ募集します。

夏休み自然観察記録コンクール

北海道自然保護協会との共催で、道内小学校に呼びかけて作品を募集する。10月の審査会後、入賞・佳作を北海道新聞紙上で発表し、優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」や「まなぶんデジタル」、基金ホームページ、モーリー通信でも紹介する。

出版事業

自然情報誌「モーリー通信」の発行

年1回(6～7月)発行。2025年度発行の第4号では「自然系博物館と学芸員の活動」を特集した。全国の博物館・図書館・教育機関等に配布し、広く周知を図った。2026年度は第5号として「北海道の湿原」を特集し、北海道の自然を多角的に伝える予定である。引き続き道内のネイチャーセンターや図書館、博物館を中心に配布するとともに、銀行や動物病院など新たな配布先も増やし、より広い層への認知向上と基金への支援の輪を広げていく。

収益事業（特別会計）

北海道の雄大な自然の中で生きる野生生物を被写体とした「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から厳選して3種類のカレンダーを制作している。2027年版カレンダーは、動物部門から吊り下げ型(1,700円)と中綴じ型(1,400円)、植物部門から卓上型(1,200円)の3種類を制作する。収益は公益目的の助成事業など、基金の活動に活かしている。

第32回夏休み自然観察記録コンクール

北海道新聞社・北海道新聞野生生物基金・北海道自然保護協会の共催で、北海道教育委員会・札幌市教育委員会の後援を得て、「第32回夏休み自然観察記録コンクール」を開催しました。

入賞作品の公開展示は下記の日・場所で行われました。

2025年10月28日(火)～11月3日(月) 札幌市資料館2階ミニギャラリー

2026年1月5日(月)～11日(日) 札幌市環境プラザ展示コーナー

〈応募状況〉

募集テーマ 身のまわりの自然をよく見て作文や絵にくわしくかいてみよう

◎応募数 作品数47点(学校数25校)

1年(5) 2年(23) 3年(6)

4年(4) 5年(5) 6年(3)

5・6年共同作品(1)

◎審査日 2025年10月2日(木)

◎審査 北海道新聞野生生物基金、北海道自然保護協会

〈受賞者・受賞作品〉

◎金賞 1点

矢田郷心晴(千歳市立末広小学校3年)

「千歳で見つけたチョウ〜2025夏〜」

〜

◎銀賞 2点

前田明緒依(白老町立白老小学校2年)

「夏休みに見つけた生きものたち」

中 耕生(苫小牧市立拓勇小学校3年)

「解読新書」

◎銅賞 5点

小野愛菜(苫小牧市立豊川小学校2年)

「2025あいながつかまえた生きもの」

の

横野結人(札幌市立平岡公園小学校2年)

「カナヘビを見つけたよ」

和田結子(岩見沢市立日の出小学校3年)

「ゆつこの国のアリのすハウス2025夏〜女王アリに会いたい〜」

工藤創太(札幌市立富丘小学校3年)

「たまごからそだてたキアゲハの成長記録」

湯浅創太(札幌市立稲積小学校5年)

「稲積公園野鳥観察記録」

◎佳作 12点

晒谷啓生(札幌市立立生館小学校1年)

「ちよつのカンサツきろく」

齊藤若葉(稚内市立稚内南小学校2年)

「見たことないクワガタ」

高橋芽里(恵庭市立松恵小学校2年)

「ミニトマトのかんさつ」

藤山結菜(札幌市立藻岩小学校2年)

「アンモナイト」

宮城宏野(札幌市立円山小学校3年)

「ダンゴムシ 夏休み観察日記」

高橋勇人(江別市立文京台小学校3年)

「とんぼに耳はあるのか?」

城舞羽波

(北海道教育大学付属旭川小学校4年)

「嵐山の葉っぱと葉みやくひょう本」

阿部清花(千歳市立みどり台小学校4年)

「うちのかなへびかなちゃん」

坂本雅人(千歳市立みどり台小学校5年)

「僕の雑草 大研究」

大江陽向(札幌市立豊園小学校5年)

「この木なんの木気になる木」

縄乃々香(札幌市立立生館小学校6年)

「色のわかれたアジサイの観察スケッチ」

吉田美里、吉田大

(網走市立網走小学校6年・5年共同作品)

「夏休みに観察したこと(オホーツク)」

◎特別賞 1点

長内智幸(札幌市立北陽小学校6年)

「円山公園野鳥図鑑」

◎学校賞 該当なし

長内智幸(札幌市立北陽小学校6年)

「円山公園野鳥図鑑」

〈金・銀・銅受賞作品の講評〉

審査委員長 横山武彦

【金賞】

「千歳で見つけたチョウ〜2025夏〜」

矢田郷心晴さんは、6月に昆虫館で



金賞作品「千歳で見つけたチョウ〜2025夏〜」

標本づくりを体験したことから、身近にはどんなチョウが見られるか、それまで見えていただけだったチョウを採集し、標本にしてよく観察し、図鑑で調べるなどしたことをまとめ、ポスター作品にしました。調べるなかで、チョウの種類だけでなく、同じ種類でオスとメスでも季節により大きさや模様などの違いがあったことにも気づきました。作品には千歳市郊外の森や畑の多い林道のわきで採集したスギタニルリシジミなど9種類と学校や道ばたの草むら・住宅街の間の防風林で採集したベニシジミなど12種類の計21種類について、スケッチと採集・観察して気づいたこと、その特徴などを簡潔に載せました。スケッチは丁寧で正確、きれいで、大きさや模様の形や色の濃さの違いもチョウの種類やオス・メスが分かった特徴として描かれていました。

【銀賞】

「夏休みに見つけた生きものたち」

生き物が大好きな前田明緒依さんは、夏休みに家の周りや旅行先で見つけた生き物42種類のうち、アゲハチョウ・オオカマキリ・アマガエル・トノサマガエル・エゾサンショウウオを家に持ち帰り飼育し、図鑑で調べながら観察しました。アゲハチョウは幼虫やさなぎの形や色が天敵から身を守っていることを知り、体の色が周りの色に近いものになるなどが確認でき、羽化するまで観察ができました。カエルも、体の色が周りに似た色に変わっていく様子を観察できました。エゾサンショウウオは水中ではエラがあり、なくな

ると陸上生活の成体になることもわかりました。スケッチや説明文からは生き物が好きな様子がにじみ出るような作品でした。

【銀賞】「解鯖新書」

中耕生さんは、苫小牧港でたくさん釣れたお気に入りの魚、サバの外形を観察し、内部は解剖してそれぞれの部分や器官をスケッチした上で、その動きまで調べてみました。スケッチは正確で彩色も美しく描かれています。外形は流線形で、背びれや尾びれなどの形が速く泳ぐ動きをしているけれども同じ仲間のクロマグロとは違うこともわかりました。背中のしま模様や腹側の色は鳥や大きな魚などに食べられない

ように進化したと考えました。口には金ヤスリのような細かい歯があり、胃の中には形がわかる小魚やオキアミがあつたので歯は丸ごと飲み込んだ餌を逃さない働きをしているとしました。他にエラや心臓、眼球、背骨、筋肉のつくりも調べ、その動きについても考えています。サバの体を解体し、丁寧に詳しく調べ、まとめた解鯖新書でした。

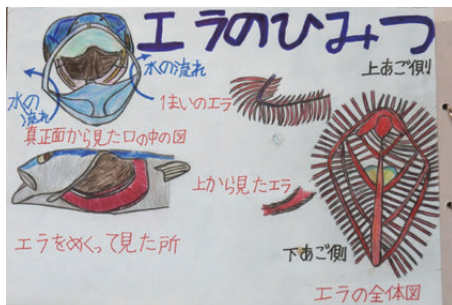
港で釣った魚3種には眼やひれの形、釣ったときの引きの強さ、キャンプ場で捕まえたクワガタはオスとメスの体や大顎の大きさや形の違い、公園で捕まえたチョウやトンボなどの昆虫についても、観察して気づいた特徴をしっかりと描いています。興味を持って観察するなかで、新しいことを発見していく様子が作品から見られるようです。

「カナヘビを見つけたよ」

横野結人さんは大好きなカナヘビを見つけ、飼育しながら観察しました。彩色されたカナヘビのスケッチが丁寧に描かれています。カナヘビが晴れた日には日向ぼっこしていること



銀賞作品「夏休みに見つけた生きものたち」



銀賞作品「解鯖新書」



銅賞作品「2025 あいながつかまえた生きもの」



銅賞作品「カナヘビを見つけたよ」

夏休み自然観察記録コンクール

や、小さいコオロギなど生きた虫を餌としてすることに気づきました。カナヘビは尻尾が切れやすいことやメスのおなかには卵があるのでそっと扱うこと、長生きのためには日陰になる葉を入れることなどに注意しながら、これからも大切に育てたいと結んでいます。

「ゆうこの国のアリのすハウス2025 夏〜女王アリに会いたい〜」

和田結子さんは、アリがどんなふうに働き、役割を果たしているか知りたくて、アリの巣がどのように作られるか観察しました。透明な容器に土を入れ、湿らせてから、公園で捕まえたアリを入れ、家の外で観察しました。アリが砂粒をくわえて運び出している様子が見られましたが、3日後に大雨でアリの巣は全滅。改めてアリを捕まえ家の中で観察を行いました。巣穴の入り口で見守っている1匹のアリ。砂粒を一つずつ運び、途中で別のアリに渡しているアリ。会話をしているようなアリも見られ、アリの巣作りでも役割分担をしているのではと考えました。作品は観察の経過をスケッチし、考察もわかりやすくまとめられています。

「たまごからそだてたキアゲハの成長記録ろく」

工藤創太さんは図鑑などで、キアゲハはニンジンが好きだと知り、庭にニ

ンジンの種をまき、キアゲハに来てもらうことにしました。キアゲハがニンジンに葉を産みつけるところから、孵化や脱皮を繰り返して終齢幼虫からさなぎになり、羽化して成虫になったキアゲハが飛び立つまでの観察記録をポスターにまとめました。成長段階の各場面のスケッチには卵や幼虫の大きさや色と模様、さなぎの形や色の变化などについてのわかりやすい描写や説明もあり、愛情深く育て、しっかりと観察したことが伺われます。

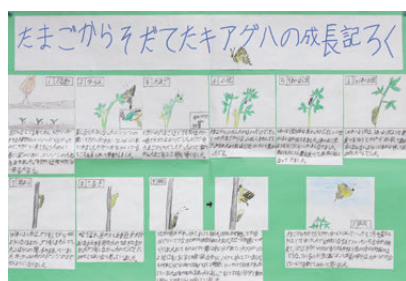
「稲積公園野鳥観察記録」

湯浅創太さんは近くの公園で行った5年間の観察で確認した91種類にのぼる野鳥のうち、夏休みに観察した16種類の野鳥を紹介しました。それぞれの大きさや羽の色や模様、姿や形、鳴き声をスケッチと解説文でまとめ、どこで観察できたかは公園の全体図に示しました。どんな特徴的な動きをしていたかなどもわかりやすく描かれています。猛禽類が6種、カササギ

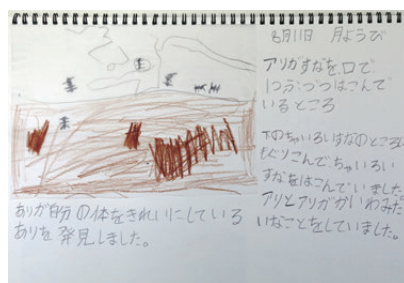
の幼鳥の群れなどが紹介されていますが、札幌には珍しい野鳥もいて、近くの公園で観察できることがわかり、これからも観察を続けていきたいと結んでいます。



銅賞作品「稲積公園野鳥観察記録」



銅賞作品「たまごからそだてたキアゲハの成長記録ろく」



銅賞作品「ゆうこの国のアリのすハウス 2025 夏〜女王アリに会いたい〜」

※夏休み自然観察記録コンクールは毎年8月上旬ごろから9月下旬まで募集します。詳細は北海道自然保護協会 HP で。



全国の書店にて
好評発売中

日高山脈は、北海道の脊梁=背骨だ。

The Backbone of Hokkaido

この山脈に刻まれた
エピソードと様々なドラマが、
ぎゅっと詰まった1冊。

The Hidaka Mountains

日高山脈襟裳十勝国立公園誕生記念出版— A4判変形オールカラー192頁
定価：2,700円+税 共同文化社

地球のエネルギーが生み出した
珍しい地質と地形、
そして貴重な自然や生態系。
この不思議な山々は国内35番目で
最大規模の国立公園になった。

特集 北海道の湿原

国内で初めてラムサール条約に登録された釧路湿原をはじめ、
北海道には多くの湿原や湿地帯があります。
中継地や越冬地としての利用や繁殖や子育てなど
多くの生き物たちにとって最適で豊かな生態系を維持しています。
泥炭湿地の微生物による浄化作用や炭素吸収など、
人間社会にも恵みをもたらしている湿原ですが、
いま開発や地球温暖化によるエリアの減少が危ぶまれています。



写真 1 北海道の代表的な低地の湿原の景観

(上) 道東霧多布湿原。ワタスゲの優占するボグ

(右下) 道東釧路湿原。スゲ類の優占するフェン、(左下) 道北サロベツ湿原。イボミズゴケの優占するボグ

多様で個性的な景観を持つ北海道の湿原 雪と霧がつくる、 世界でも特別な自然

北海道には、日本の中でもとりわけ多様で個性的な景観を持った湿原が広がっています（写真1）。道東の釧路湿原、霧多布湿原、そして道北のサロベツ湿原をはじめ、湿原は一見どこも似ているように見えますが、実は地域ごとにまったく異なる表情を持っています。その違いを生み出しているのは、北海道ならではの気候——冬の雪と、夏の霧です。

北海道の湿原は「泥炭地湿原」

北海道の湿原の多くは、植物の遺体が分解されずに積み重なってできた「泥炭」が厚く堆積した泥炭地湿原です（図1）。寒さと過湿という条件がそろったことで、植物が腐らずに蓄積し、何千年もかけて湿原が盛り上がっていきます。泥炭は1年にわずかに1mmほどしか増えません。1m積もるには1,000

年もかかります。北海道の湿原は、まさに「時間がつくった大地」といえます。

泥炭地の湿原を形づくる二つのタイプ——フェンとボグ

北海道の湿原を理解するうえで欠かせないのが、フェン（fen）とボグ（bog）という二つのタイプです。

フェン…地下水や周囲の水の影響を受け、スゲ類やヨシが生える富栄養で弱酸性な水質の湿原
 ボグ…雨水だけで維持され、ミズゴケ類が優占する貧栄養で強酸性の水質の湿原

時間がたつにつれて泥炭が積み重なり、周囲の水が届きにくくなるため、湿原はフェンからボグへと、植物が育ちにくい環境へと変化していきます。

文・写真●矢部 和夫（札幌市立大学名誉教授）

やべ かずお 日本湿地学会会長。一般社団法人ほろむい七草の会代表理事。石狩川河口湿地調査隊代表。美々川自然再生アクションプログラムWG座長。気候との関係で湿原植生の成立機構を研究するとともに、湿地保全、自然再生、ビオトープ創出の研究・実践に取り組みながら、多機関連携による保全活動と地域への普及啓発を進めている。

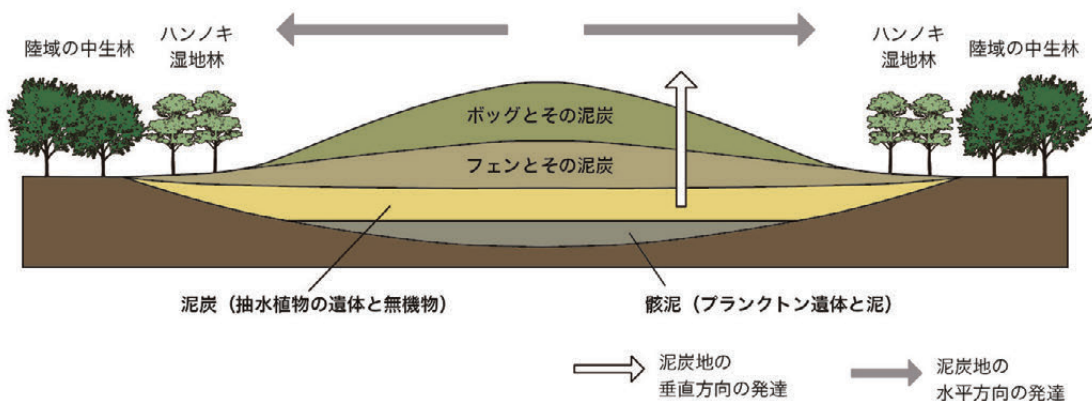


図1 泥炭地湿原の発達に伴うフェンからボグへの変化

- ① 川の流れが変わり急に土地が湿る。
- ② 湿潤な状態で酸素が不足し、植物遺体が分解しないので泥炭として堆積し、遺体の分解によるミネラルや養分の供給がなくなる。
- ③ 湿原表面はどんどん隆起する（1000年で1m）。隆起すると表層地下水や河川水などの地表水に含まれるミネラルや養分の供給がなくなり、ミネラルや養分の乏しい雨水だけとなる。このため貧栄養化し酸性化する。
- ④ 酸性化はミネラル（ Ca^{2+} や Mg^{2+} ）の濃度が低下し、アルカリ度が低下することによって起こる。

湿原の分類には、水の供給源に基づく「低層湿原」と「高層湿原」という水文学的分類もあり、フェンとボグにおおよそ対応しています。低い・高いは周りの水面に対する湿原表面の位置で、低層湿原は水面付近に湿原表面があり、高層湿原の表面は周りの水面よりずっと上にあります。

気を付けたいのはフェンとボグは植生名であるのに対して低層湿原と高層湿原は生態系を指しているということです。低層湿原なのにミズゴケ類が多い湿原があったりして両者は一致しないことが多々あります。日本では「低層湿原」がヨシ原など沼沢地（水生植物群落）に誤用されてきましたし、国際的にはフェン・ボグで議論する必要があります。また、高層湿原・低層湿原を植生名として使うのは不適切です。

かつて私はフェンをスゲ湿原、ボグをミズゴケ湿原と呼びました。その後国際的な議論を考慮して英名のカタカナ表記にしました（矢部1993）。しかし、その後サロベツ湿原、雨竜沼湿原、釧路湿原などの観光案内やビクターセンターの展示で提案したスゲ湿原、ミズゴケ湿原を使う事例が多いことに気づきました。フェンとボグは日本語に訳するのが難しい用語です。スゲ湿原とミズゴケ湿原は植生の姿を表している用語なので積極的に使っていないと思っています。

北海道の湿原が地域で違う理由——雪と霧

湿原の表面には、お互いに密にくっついたミズゴケ類の茎がつくる「ハンモック（小丘）」が多数見ら



写真2 ハンモックの点在する道東の風連川湿原の景観

れます。ハンモックはブルテ（小凸地）とも呼ばれます。ミズゴケ類は根を持たず、茎の下に垂れた「下垂枝」に水を吸い上げる仕組みがあります。しかし、毛細管現象で吸い上げられる水には限界があり、ハンモックが高くなりすぎると乾燥して成長できなくなり、高さは地域によって大きく異なります。日本海側では高さ20 cm程度の低いハンモックが多いのに対し、太平洋側東部では60 cmにも達する大きな隆起



チャミスゴケのハンモック

ハンモックが形成されます（写真2、図2）。

この違いを生む最大の要因は、夏の乾燥です。日本海側はよく晴れて霧が発生せずに夏に乾燥しやすいため、ミズゴケ類は地下水から大きく離れて成長できません（矢部2019）。一方、太平洋側東部では濃霧によって乾燥が抑えられ、水面から大きく離れた高さまで成長できます。後述のようにミズゴケ類の生産量は雪圧のために日本海側の方が多いです。冬の「雪圧」も重要です。日本海側の多雪地帯では、ハンモックが雪の重みで押しつぶされ、春には地下水に近い位置から再び成長を始めます。この「リセット効果」によって、ミズゴケ類は毎年再成長を繰り返すため、生産量が多くなります。日本海側の湿原では多雪でミズゴケ類の成長量が促進されるため太平洋岸の湿原よりボグが発達しやすいといえます。

一方、積雪の少ない太平洋側の地域では雪圧によるリセットが起こらず、ミズゴケ類は乾燥ストレスを受けやすくなります。そのためミズゴケ類の生産量が少なく、ポッグへ向かう遷移が進みにくくなっています。

●日本海側（サロベツなど）

- ・夏晴れて乾燥するためハンモックは低い。
- ・冬の積雪が多いため、雪の重み（雪圧）でミズゴケ類のハンモックが押し下げられ、毎年、成長がリセットされる
- ・そのためミズゴケ類の生産量は多いが、ハンモックは平たい

●太平洋側（釧路・霧多布など）

- ・夏に濃霧が発生し、ミズゴケ類の乾燥が抑えられるためハンモックは高くなる。
- ・冬の積雪が少ないためハンモックが高く育つが、生産量は少ない。
- ・つまり、ハンモックの高さを決めるのは、霧、ミズゴケ類の生産量を左右するのは「雪」という、北海道ならではの仕組みがあるのです。

日本の湿原は世界でも特別

湿原研究が進んだヨーロッパでは、石灰岩地質が豊富にあり、地下水や周囲から流入する地表水の物質の影響を受けるフェンの泥炭水はカルシウムやマグネシウムの濃度が特に高いです。しかし、日本は火山性地質のため、泥炭水中にカルシウムやマグネシウムが少ない、ヨーロッパのフェンの分類に当て

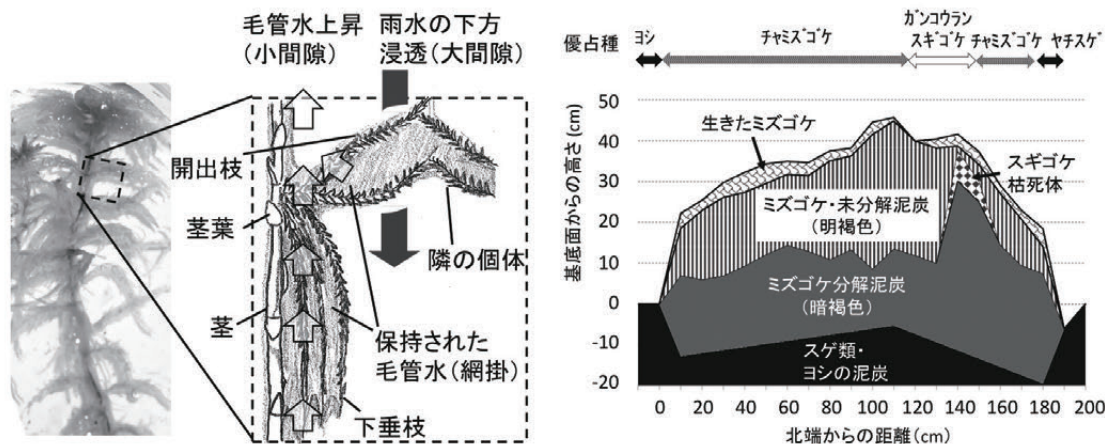


図2 ミズゴケ類の茎の構造とハンモック断面の構造。矢崎友嗣氏作成。

はまらない日本独自の湿原タイプが分布しています。日本の湿原の国際的な位置づけは、もう少しで整理できる段階にありますが、この点については別の機会に紹介したいと思います。

失われれば二度と戻らない

湿原は非常に脆い生態系です。水の流れが少し変わるだけで、ミズゴケ類が枯れたり、植物が消えたりします。森林のように、切ってもまた生える、というものではありません。だからこそ、北海道の湿原を守るには、知ること↓理解すること↓賢く利用すること（ワイズユース）が欠かせません。観光と保全を両立させ、地域の自然を未来へつなぐ仕組みづくりが求められています。

おわりに

北海道の湿原は、雪と霧がつくり出す、世界でも特別な自然です。ミズゴケ類の小さなハンモックから、地下水の性質、地域ごとの気候差まで——その成り立ちは驚くほど複雑で、奥深いものです。何千年という時間をかけて育まれたこの自然を、私たちの世代で失わないよう、まずは、その魅力と仕組みを知ることから始めていきたいものです。

【引用文献】

- 矢部和夫（1993）北海道の湿原。（東正剛・阿部永・辻井達一編）生態学からみた北海道40—52。北海道大学図書刊行会、札幌。
- 矢部和夫（2019）北海道に広がる泥炭地湿原の地理的な変異と気候条件。水環境学会誌、42：240—243。

湿原を蛇行しながら ゆっくり流れる河川。 北海道を象徴する代表的な 風景のひとつ——釧路湿原。



写真1 釧路湿原の様子。湿原内を河川が蛇行して流れています

日本初のラムサール条約登録湿原

日本の湿原で最大面積を誇るのが釧路湿原です。その面積は約22,070 haで、南北約36 km、東西約25 kmにもおよび、一周すると100 km以上になります。一部は釧路湿原国立公園や天然記念物指定エリアとなっており、ラムサール条約登録湿地にも指定されています。また、特別天然記念物のタンチョウの繁殖地としても有名です。湿原は、太平洋に面する釧路市街地の後方から丘陵地の際まで広がっており、釧路川とその支流群、新釧路川、阿寒川が流れ、湿原内が平坦で勾配が小さいことから、河川は蛇行しながらゆったりと流れています。この景観が釧路湿原の特徴の一つで、湿原のPR写真や動画では、ほぼ蛇行河川と湿原の構図が使われています。河川は融雪期や大雨の際に氾濫を繰り返し、時には流路が変わってしまうこともあります。さらに網の目状に川の支流が存在し、容易に人間が近づけない環境となっています。また、湿原内には、地表面を見て

文・写真●富士田 裕子（北海道大学名誉教授）

ふじた ひろこ 宮城県仙台市生まれ。理学博士。東北大学の学部・大学院時代は冷温帯湿地林の分化と立地環境（主に地下水位や土壌環境）の関係を研究。北海道大学に赴任してからは、湿原植生と立地環境、湿原の保全や復元手法を研究。第13回尾瀬賞を受賞。著書に『サロベツ湿原と稚内内砂丘林帯湖沼群—その構造と変化』、『湿原の植物誌—北海道のフィールドから』などがある。

もどこに存在するのかわかりにくい「ヤチマナ」と呼ばれる水で満たされた穴があり、深いものは3 mほどあり、うっかり踏むと腰や胸までストンと落ち大変危険です。著者は湿原全域で植生調査を実施するプロジェクトの一調査員として、数年間、徒歩あるいはカヌーやボートで湿原の奥深くまで分け入った経験があります。カヌーで川をさかのぼって進むと急に視界が開け、河川が合流する場所に水草で覆われた大きな沼が現れ、「景観や植生の規模からみても、釧路湿原はまぎれもなく日本一の低地の湿原なんだ。」としみじみ感動した思い出があります。

永い年月に育まれた水循環メカニズムが 生んだ豊かな生態系

次に釧路湿原がどのように出来上がったのかを、新潟大学の高清水先生らの論文[※]を元に簡単に説明しましょう。地球は今から12,000年前ごろに最終氷期の末期をむかえ、間氷期という暖かい時期に移行します。気温の上昇により氷河や高緯度地域の氷が解け海水の堆積が増え、次第に海面が上昇します。海面が高い時期は約7,000年前ごろにピークを迎え、釧路湿原のあたりは開析谷^{かきせき}の奥まで海が入り込み、海岸では砂嘴^{さし}が発達して、広大な汽水湖が形成されました。その後、次第に気温が低下し海面も低くなっていき、陸から供給された土砂で汽水湖の沿岸が埋まり、約5,000年前から最上流部で湿原の形成が始まります。湿原が徐々に大きくなり、その過程で入江の一部がシラルト口湖や塘路湖^{ちやうこ}、達古武沼^{ちこぶぬま}などの湖として残され、約1、

000年前にほぼ現在の湿原が出来上がりました。この様に釧路湿原の形成には、長い年月がかかっているのです。

釧路湿原は多数の河川が流入し、さらに湿原と接する台地の縁辺部から豊富な湧水が供給されるので、大量の水で満たされています。さらに洪水によって土砂や栄養塩類が運ばれることから、ヨシやスゲ類の優占する低層湿原植生が主体となっています（写真2）。またハンノキ湿性林も湿原上流部や湿原内の自然堤防跡などに広く分布し（写真3）、湿原の中央部の赤沼周辺から温根内の木道付近には、大きな高層湿原も発達しています（写真4）。釧路湿原に生育する維管束植物数は約730種類と非常に多く（写真5）、多彩な植物群落も見られます。

止まらない開発や環境破壊

かつての湿原面積は現在よりかなり大きく、北海道教育大学の岡崎名誉教授の報告（1975）の推定では、当時の湿原の約23%にあたる6,800haが開発により失われたとされています。そのほとんどが湿原下流部に集中し、特に阿寒川の分流、新釧路川の掘削、新釧路川の左岸と右岸堤防の完成によって急激に進みました。また湿原上流部では、1960年代から70年代にかけて久著呂川、雪裡川、幌呂川などの河川改修が進み、河川の直線化と流域の農地開発、土地利用の変化により、湿原に流入する土砂量が増加したことが指摘されています。

2000年代に入ると、釧路湿原での環境変化や植生変化に注目が集まるようになり、行政も開発か



写真2 広大なヨシ群落のところにハンノキが生えており、アフリカのサバンナのように見えます



写真3 ハンノキ湿性林



写真4 高層湿原

ら再生へと視点を変えました。環境省と国土交通省は03年に施行された自然再生推進法をうけ、釧路湿原の自然再生に着手しました。植生変化と人間による環境変化との因果関係の解明が十分とはいえない中、様々な事業や実験が始まりました。事業に対するモニタリングと結果の解析、そして十分な評価と事業へのフィードバックを長く続けることが課題と考えられます。

一方で、開発から再生にかじを切ったはずなのですが、湿原や湿原周辺の開発や環境破壊は未だ止まりません。釧路湿原をめぐる一連の騒動から言えることは、釧路湿原を抱える市町村の住民からの声と行政の対応が重要で、それを後押しするのは私達、一般の人達からの応援なのです。

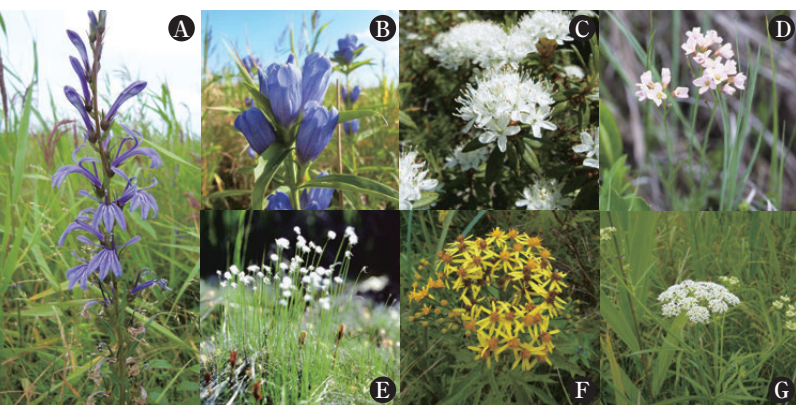


写真5 釧路湿原の植物。Aサワギキョウ Bエゾリンドウ Cカラフトイソツツジ Dハナタネツケバナ Eヒメワタスゲ Fハンゴンソウ Gトウヌマゼリ

- 引用文献 ※ 1 Takashimizu Y, Shibuya T, Abe Y, Otsuka T, Suzuki S, Ishii C, Miyama Y, Konishi H, Hu SG (2016) Depositional facies and sequence of the latest Pleistocene to Holocene incised valley fill in Kushiro Plain, Hokkaido, northern Japan. Quaternary International. 397: 159-172.
※ 2 岡崎由夫 (1975) 釧路湿原の変容—その開発と非湿原化—。(釧路市立郷土博物館 編) 釧路湿原総合調査報告書, 3-15. 釧路市立郷土博物館, 釧路。
※ 3 Nakamura F, Suda T, Kameyama S, Jitsu M (1997) Influences of channelization on discharge of suspended sediment and wetland vegetation in Kushiro Marsh, northern Japan. Geomorphology, 18: 279-289.

参考文献 釧路湿原の面積については、釧路湿原国立公園連絡協議会 (<https://www.kushiro-shitsugen-np.jp/deta/kiso/>)を参照

MGロードや トラスト運動など 人との関わりが強い湿原 ——霧多布湿原。

文・写真●加藤ゆき恵（釧路市立博物館）

かとう ゆきえ 1978年、愛知県瀬戸市生まれ。北海道大学大学院農学院博士後期課程単位取得退学、博士（農学）。専門は湿原の植生、カヤツリグサ科スゲ属植物、植物研究史。ここ数年は博物館がある春採公園の植物相・フェノロジー調査にも取り組んでいる。



琵琶瀬展望台からみた霧多布湿原

「花の湿原」として知られる霧多布湿原は、浜中町の海岸に広がる面積約3、168 haの広大な湿原です。砂州で海から隔てられてできた湖成湿原で、砂丘列の跡が大小約30個の細長い湖沼として残っています。^{*1}「霧多布泥炭形成植物群落」として1922年という早い時期に国の天然記念物となりました。また、55年には厚岸道立自然公園（現在の国定公園）に指定、2012年に国指定厚岸・別寒辺牛・霧多布鳥獣保護区及び特別保護地区、1993年にはラムサール条約登録湿地、2021年には道立自然公園から厚岸霧多布昆布森国定公園になり、何重にも保護されています。

霧多布湿原と人との関わり

霧多布湿原は人との関わりが深い湿原です。湿原内の湖沼のうち、湿原中央を走るMG（Marsh Grassland）ロードに近くて比較的大きい氷切沼は、

かつては漁業に使う氷を切り出すのに使われていました。地元の方によると、氷切沼と呼ばれる場所は湿原の北の方にもあったそうです。MGロードに相当する部分は、天然記念物指定以前から生活道路として使われていました。また、海岸近くの湿原域は、かつてはコンブ漁に使う馬が放牧されていて、いまでも湿原内に木の杭が残っています。

1960年5月のチリ津波では多くの住宅が破壊され、仮設住宅用地不足のため緊急措置で天然記念物エリア内の国有未開地に住宅を建設し、のちに指定地から解除されたという出来事もあり、^{*2}人の生活圏と湿原が密接していることが分かります。

霧多布湿原は、日本において初めて保全のためのトラスト運動が導入された湿原でもあります。湿原の中心部以外は民有地が多く、特に海岸沿いでは昆布を乾燥させる干場や宅地を造るために埋め立てが行われていました。^{*3}これらの民有地や湿原上流の

湿原の植生

山林をトラストが買い取り、湿原の保全活動を行ってきました。^{*4} 買い取った土地では復元試験も行い、昆布干場跡地の表層土壌を除去して植生変化を調査・解析する研究も行われています。^{*5}

霧多布湿原の植生は、広い範囲がヌマガヤ湿原（中間湿原植生）で、湿原中心部にはチャミズゴケのブルテ（ハンモック・小凸地）が点在しています。湿原の南部にはヨシ・スゲ湿原（低層湿原植生）もあり、琵琶瀬川の河口に近いところは海水の影響を受ける塩湿地で、奥琵琶瀬野鳥観察公園ではウミミドリやアツケシソウといった塩湿地特有の植物が見られます。

ヌマガヤ湿原では、6月上旬～中旬にはワタスゲの穂、6月下旬～7月上旬にはゼンテイカ（霧多布ではエソカンゾウと呼んでいます）の黄色い花が一面に広がり、季節の風物詩となっています。増加するエゾシカの食害によってゼンテイカは花の数が減っていました^{*6}が、周囲に電気牧柵を設置することでエゾシカの進入を防ぎ、再びたくさんの花が見られるようになりました。^{*7}しかし、ワタスゲもゼンテイカも気候によって自然の豊凶があり、毎年必ず見事な光景を見られる訳ではありません。遠くから来た観光客はがっかりするかもしれませんが、予測不可能なところが自然の面白さでもあります。

継続調査から分かる変化

湿原中心部の天然記念物エリアでは過去に何度も植生調査が行われてきました。^{*8} 2017年からは環

境省のモニタリングサイト1000の湿原植生調査を行っていて、これまで17年、20年、25年の3回調査を行いました。この調査では、湿原内に約600mの調査ラインを設定し、そのライン上に30個の方形区を設置して、同じ方形区内の植生を継続して記録しています。調査開始から10年未満ということもあって、多少種組成の増減は見られるものの、今のところ調査地全体では目立った植生の変化はありませんが、1カ所、劇的な変化が見られた方形区がありました。

大きいチャミスコケブルテの上に設置したある調査区は17年の設置時から一部くぼ地があり、ハナゴケ類が穴を埋めていました。20年にはもともとあったくぼ地の方向にチャミスコケブルテが崩れ始めていたものの、その原因が局地的な乾燥なのかエゾシカによるものかは判断出来ませんでした。25年にはコードラートを斜めに通り過ぎる「シカ道」*ができていて、斜めからの写真でも分かるとおり、大きいチャミスコケブルテが2つに分断されていました。周りに歩きやすい平地はいくらでもあるのに、エゾシカたちはなぜこのブルテの上をわざわざ歩いたのか……。エゾシカの気持ちがかんがわりません。

別のチャミスコケブルテ上の方形区では、ミスゴ



6月中旬の仲の浜木道沿いのワタスゲ。この写真を撮影した2015年は当たり年でした

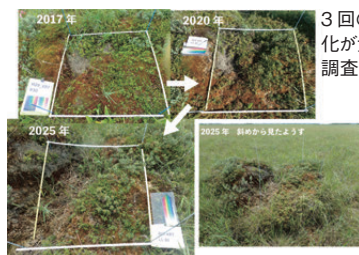


6月下旬の仲の浜木道沿いのゼンテイカ（エゾカンゾウ）。電気牧柵が奏功してたくさんの花が咲いています（2022年撮影）

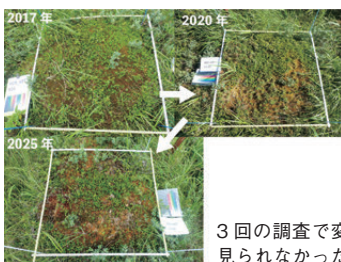
ケの上に生えるツツジ科植物の被度に多少変化はありますが、ブルテ自体は維持されています。

調査ラインや周辺では、コバギボウシやミヤマアキノキリンソウ（コガネギク）などエゾシカが好む植物の食害も観察されました。エゾシカ個体数増加によって起こる踏圧や食害による湿原植生への影響は日本各地の湿原で報告されていて、どう折り合いをつけるか、も重要な課題になっています。

11年からはNPO法人霧多布湿原ナショナルトラスト主催で釧路市立博物館も協力し、浜中町の植物標本を作成する取り組み「ハーバリウム霧多布」*が行われています。21年12月現在で、浜中町で記録されている873分類群（証拠標本を伴わないものを含む）の維管束植物のうち465分類群の学術標本を作成し、霧多布湿原センターと釧路市立博物館で保管しています。これらの標本は10年代以降の霧多布湿原をはじめとする浜中町の植物相を記録するとともに、記録を未来へ伝える重要な役割を果たします。



3回の調査で変化が大きかった調査方形区



3回の調査で変化があまり見られなかった調査方形区

- 引用文献 ※1 辻井達一・岡田 操 (2007) 霧多布湿原—海岸の湿原 5. 北海道の湿原 (辻井達一・岡田 操・高田雅之編著), p64-67. 北海道新聞社, 札幌.
- ※2 川守田貢・浜中町立霧多布小学校 (1990) 霧多布小学校物語 別冊「チリ沖地震を語る～漂流5時間」 (2019年復刻版発行).
- ※3 阪野真人 (2014) 霧多布湿原 われらが花園. 湿地への招待 ウェットランド北海道 (北海道ラムサールネットワーク編), p164-173. 北海道新聞社, 札幌.
- ※4 環境省自然環境局生物多様性センター (2026) 霧多布湿原サイト (湿原植生・物理環境調査). 2025年度モニタリングサイト1000 陸水域調査報告書, p75-91. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- ※5 富士田裕子・鈴木唯人・金子和広・元廣はるな・河内直子・辻 ねむ・三木 昇 (2025) 霧多布湿原における植生復元試験—昆布干場表層土砂除去後7年間の植生遷移—. 植生学会誌, 42: 1-12.
- ※6 加藤ゆき恵・富士田裕子 (2023) 道東湿原めぐり 愛しの生態系 研究者とまわる「陸の豊かさ」, p128-135. 文一総合出版, 東京.
- ※7 田中瑞穂 (1959) 北海道東部湿原の群落学的研究 (第2報) 霧多布湿原植物群落の構造. 北海道学芸大学紀要 (第2部), 10: 112-125.
- ※8 吉川正人 (2023) 変わりゆく湿原植生の宝庫. 愛しの生態系 研究者とまわる「陸の豊かさ」, p116-121. 文一総合出版, 東京.
- ※9 伊藤大雪 (2022) 地域とともにつくる植物標本集「ハーバリウム霧多布」の取り組み. 釧路国際ウェットランドセンター技術委員会調査研究報告書令和元年度～3年度「持続可能な開発と賢明な利用」, 9-17. 釧路国際ウェットランドセンター, 釧路.

炭素を蓄えたミズゴケは 温暖化を含む気候変動の緩和に 湿原再生は未来への 学びの場となりうるか —サロベツ湿原

文・写真・露崎 史朗

(北海道大学・大学院地球環境科学研究院)

天然のスポンジ・ミズゴケがもたらす 生態系サービス

北海道のミズゴケ湿原は、もしかすると地球でもっとも重要な生態系の一つになりつつあるのかもしれない。ミズゴケは、大量の水を蓄える性質を持ち、湿原を支える「天然のスポンジ」とも言える存在です。栄養塩をほとんど必要としないため、地下水や河川水の供給を受けず、主に雨水で維持される「降雨涵養型湿原」と呼ばれる貧栄養な生息地に多く見られます。こうした湿原は、私たちに多くの恩恵、生態系サービスをもたらしています。

ミズゴケがつくる泥炭湿原は、特に炭素を貯蔵する能力に優れています。泥炭とは、植物の枯葉や枯枝が分解されずに堆積したもので、いわば植物遺骸の塊であり、炭素の塊でもあります。もし世界中の泥炭が蓄えた炭素が全て大気中に二酸化炭素として放出されれば、大気中の二酸化炭素濃度は倍になる



サロベツ泥炭採掘地で、回復が遅れている地域です(2016年4月22日)。採掘から30年以上経過していますが、随所に裸地が残っています



歌才湿原で行った「ミズゴケお守り隊」活動の様子です(2025年5月11日)。作業のあとにはみんなで「おいしい」お昼をいただきました。撮影：永田優(黒松内ブナセンター)

という試算もあるほどです。つまり、ミズゴケ湿原を保全することは、温暖化を含む気候変動の緩和に一つの鍵となります。

北海道北端に広がるサロベツ湿原は、日本最大級あるいは最大といえる規模のミズゴケ湿原が低地に広がっている点が大きな特徴です。サロベツ湿原の標高は、実際に3~7mしかなく、ほぼ海拔と同じ高さに位置しています。その面積は、約6700haであり、エスコンフィールド(4.8ha)の約1、400個分に相当します。また、サロベツ湿原の泥炭の深さは、5m程度の場所が多く、この厚さは日本の湿原の中でも際立っています。こうした広大な湿原の下には、数千年かけて蓄積された膨大な量の泥炭が眠っていることになります。貧栄養なミズゴケ湿原は、特殊な環境に適応した動植物の貴重な生息地でもあります。サロベツ湿原では、動物からも栄養を得るモウセンゴケなどの食虫植物、菌類の助けを借りて栄養を獲得するラン科(トキソウ、コバノトンボソウなど)やツツジ科(ホロムイツツジ、ツルコケモモなど)の多様な植物を見ることが出来ます。また、ミズゴケが大量の水を保持することで、地域の水量が安定し、減災にも寄与しています。サロベツ湿原に発達するミズゴケ泥炭は、湿原の生態系サービス機能を支えている源といってもよいでしょう。

しかし、サロベツ湿原を始めとする日本のミズゴケ湿原は、過去数十年で大きく減少してしまいました。サロベツ湿原では、1970年から2003年にかけて商用目的の泥炭採掘が行われ、毎年数haから数十haの湿原が失われました。残された湿原でも、

ミズゴケが再び広がる環境を整える試み

こつした知見を活かすため、道南黒松内町の歌才

ミズゴケ再生の見通しが得られてきました。ただし、ミズゴケ「湿原」としての完全な再生には、まだ長い時間が必要です。

ササの侵入などによる生態系の劣化が進んでいます。これら原因の多くは、私たちヒトの活動にあります。一方で、泥炭採掘跡地にはナガバノモウセンゴケのような希少な食虫植物が再定着しており、湿原劣化が進む中で残された貴重な生物多様性の象徴とも言えます。



泥炭採掘跡地で見られたナガバノモウセンゴケです(2005年7月3日)。日本ではサロベツ、大雪、尾瀬からのみ報告されている絶滅危惧種です



採掘跡地に侵入し定着したミズゴケです(2023年7月15日)。丸みのあるカプセル状の部分は蒴(胞子囊)で、コケの先端にできる胞子を入れた容器です



初夏の泥炭採掘が行われていないサロベツ湿原です(2005年7月1日)。本来のサロベツ湿原であり、泥炭採掘跡地がこのような湿原が再生できれば理想的ですが…

あれば嬉しく思います。

もちろん、地域や組織の連携には課題も残っていますが、こつした取り組みを積み重ねることで、湿原の未来を守る力につながると考えています。ミズゴケと、その下に眠る膨大な泥炭の価値は計り知れません。この貴重な財産を次の世代へ受け渡すためにも、今後も研究と保全活動が続けていきたいと思います。そして何より、北海道が誇るサロベツ湿原が、これからも健全な姿で未来へと引き継がれていくことを心から願っています。

本実践は、旭硝子財団ブループラネット地球環境特別研究の一環として実施しています。

参考文献

露崎史朗(2025) 湿原が世界を救うー水と炭素の巨大貯蔵庫・築地書館・(ISBN:13 978-4806716785)

つゆざき しろう 1961年茨城県生まれ。火山遷移に関する研究で北海道大学大学院理学研究科より理学博士号を取得。現在、北海道大学大学院教授。専門は植物生態学・環境保全学。永久調査区法を用いて有珠山、渡島駒ヶ岳、サロベツ湿原などで遷移研究を行うほか、海外の火山や湿原の調査にも取り組む。著書に『攪乱と遷移の自然史』『湿原が世界を救う』などがある。



餌が少なくなると北海道東部の給餌場に集まるタンチョウたち

絶滅危惧Ⅱ類から外れたが、
湿原環境は安心できる段階ではない

環境省が2026年3月に公表した「第5次レッドリスト」で、日本（北海道）のタンチョウは「絶滅危惧Ⅱ類」から外れ、「準絶滅危惧」に分類された。これは、絶滅の危険度が以前より低くなったことを示す一方で、「存続基盤がまだ十分に安定しておらず、将来的に再び危険性が高まる可能性がある種」ということも意味します。つまり、状況は改善したもの、安心してされる段階ではありません。

現在のタンチョウの生活は、自然環境だけに支えられているわけではありません。冬には給餌に依存する個体が多く、給餌がなければ十分な餌を確保できない可能性があります。また、給餌に頼らない個体でも、家畜飼料用トウモロコシ（デントコーン）を

食べたり、農地で採餌したりすることが多く、人の経済活動と深く関わっています。特に秋から冬にかけて自然の餌が少なくなる時期には、収穫後のデントコーン畑や稲田で餌を探す姿がよく見られます。これらの農地は、タンチョウにとって効率よく餌を得られる重要な環境となっています。

また、これまで主に北海道東部に集中していた分布が、道北やオホーツク、道央地域へと広がってきたことも、絶滅リスクが低下した理由の一つです。オホーツクや道央では、繁殖だけでなく越冬する個体も増えています。しかし、分布が広がったからといって、どこでも繁殖できるわけではありません。タンチョウの繁殖にとって最も重要なのは湿地環境です。「タンチョウは湿原の鳥」と言われますが、一年中湿地だけで暮らしているわけではありません。私が

通年観察しているつがいで、季節や繁殖状況に応じて利用する環境が変化します。巣を造る場所は基本的に湿地で、枯れたヨシなどを巣材として使います。典型的には低層湿原が営巣地となりますが、例外的に牧草地やササ原に巣を造ることもあります。それでも、繁殖に適した環境として湿地が最も重要であることに変わりはありません。

タンチョウの分布拡大には、
繁殖に適した湿地の存在が欠かせない

近年、道央地域で確認されている繁殖つがいの、例外なく湿地に巣を構えています。ただし、利用する湿地の広さはつがいによって異なります。広い湿地で繁殖するつがいは、ヒナが飛べるようになるまで湿地内で生活することが多い一方、狭い

アイヌ語で

サルルンカムイ「湿原の神」と

呼ばれるタンチョウ

採餌から繁殖・子育てまで

タンチョウの分布拡大に重要な環境―湿原

文・写真・正富 欣之

（一般社団法人タンチョウ研究所所長）

まさとみ よしゆき 1971年札幌市生まれ。北海道大学大学院工学研究科修了。同大学院地球環境科学研究科でタンチョウの個体群動態に関する研究により博士号を取得。2007年から同大学院などで研究員としてタンチョウに関する研究に従事。2019年に（一社）タンチョウ研究所を設立し、新たに生息地域となった道央や道北での調査・研究を重点的に行っている。



道央地域で湿地のすぐ隣にメガソーラーが建設されている場所

湿地では周辺の農地など湿地以外の環境を利用することもあります。

タンチョウの分布拡大には、繁殖に適した湿地の存在が欠かせません。つがいは適した湿地を求めて移動し、繁殖テリトリーを形成します。一度繁殖を始めると、毎年同じ場所で繁殖することが多いですが、環境が変更されて適さなくなると別の場所へ移動します。つまり、湿地が失われれば、その場所からタンチョウがいなくなる可能性が高いのです。

タンチョウの繁殖テリトリーは数kmに及びます。ヒナは孵化して数日で歩き始め、成長に伴い行動範囲が広がります。孵化後20日ほどのヒナが巣から約3km移動した例や、孵化後2か月半でまだ飛べない時期に約10km離れた場所まで歩いた例もあります。このため、巣そのものだけでなく、周辺の広い環境が非常に重要です。「巣がない場所だから開発して



十勝地方で越冬期（1月下旬）に餌を求めて飛来する収穫後のデントコーン畑



北海道北部の低層湿原で抱卵する個体（写真中央）



道央地域に残る湿地で営巣するつがい



1月下旬にオホーツク地方の河川でねぐらをとるタンチョウの群れ

参考文献
 正富宏之 (2010) タンチョウいとちたきさまなれど. 北海道新聞社, 札幌
 正富欣之, 小山内恵子 (2022) 道央圏における 2020 年秋期のタンチョウの生息状況. Bird Research, 18:S9-S13. <https://doi.org/10.11211/birdresearch.18.S9>

も問題ない」とは言えず、タンチョウの行動生態を理解していなければ、繁殖に必要な環境を失わせてしまう危険があります。

例えば、巣の近くの湿地が失われた場合、そこにヒナの成長に必要な餌生物が多く存在していれば、影響は大きくなります。湿地を埋め立ててソーラーパネルを設置すると、湿地としての連続性が失われ、生き物が減ることで餌資源も少なくなります。さらに、移動できる範囲も制限され、タンチョウにとつて暮らしにくい環境になります。タンチョウが営巣する場所は、生物多様性が保たれた豊かな自然環境であることが多く、タンチョウはその指標種とも言えます。つまり、タンチョウの営巣環境を守ることは、周囲の多様な動植物を守ることにもつながります。

道央地域での繁殖状況の一例として、25年には苦

小牧市勇払原野で3つがい、千歳川流域の遊水地で2つがいのタンチョウが産卵しました。前者は自然の湿地、後者は人工的に造成された湿地ですが、いずれも繁殖に適した環境が整っていたため、繁殖が成功したと考えられます。

今後、道央地域でタンチョウの個体数をさらに増やし、絶滅リスクをより低く保つためには、残された湿地の保全に加え、自然に配慮した河川改修などによる湿地の回復・造成が重要になります。タンチョウの未来を守るためには、湿地を中心とした生息環境を長期的に維持・再生していくことが欠かせません。本稿では、道央地域については環境省の業務として実施した調査結果を、オホーツク地域についてはJAC 環境動物保護財団の助成を受けて行った調査結果を含めています。

キタサンシヨウウオの生息地の保全は、

湿原という生態系の維持、

さらには気候変動対策に深く関わる課題

文・写真・照井 滋晴

(NPO法人環境指標推進ネットワーク) PEGG 理事長

立地規制や環境配慮の仕組みが十分とはいえないなか急速に進められた再エネ事業の導入

釧路湿原域では、近年、太陽光発電施設の急増によってキタサンシヨウウオの生息環境の劣化や消失が生じ、深刻な課題となっています。2011年の東日本大震災と、それに伴う福島第1原子力発電所の事故を契機として、日本では脱原発と再生可能エネルギー導入の機運が高まりました。翌12年には再エネを用いて発電された電力の固定価格買取制度（FIT制度）が開始され、全国的に太陽光発電を中心とした再エネの導入が急速に進みました。しかし、この制度は導入初期において立地規制や環境配慮の仕組みが十分とは言えず、結果として各地で自然環境の破壊や景観の悪化、さらには土砂災害の発生などが問題となりました。釧路湿原域においても同様に太陽光開発が進み、湿原の一部が改変される事例が相次ぎました。本来、太陽光発電はCO₂を排出しないクリーンなエネルギーであり、気候変動対策として重要な役割を担います。しかし、釧路湿原のように炭素の吸収・貯留機能を持つ湿地を破壊して設置される場合、その効果は相殺されるどころか、他の生態系サービスまで失い、新たな環境負荷



キタサンシヨウウオの成体と卵囊

を生むという矛盾が生じます。

看過された天然記念物キタサンシヨウウオの生息地

釧路湿原は、特別天然記念物であるタンチョウや、氷河期の遺存種とされるキタサンシヨウウオにとって重要な生息地です。特にキタサンシヨウウオは、釧路市において文化財保護条例に基づく天然記念物に指定されており、その生息地を改変する場合には現状変更の許可申請や保全対策が必要とされています。しかし実際には、15年頃から、生息地が事前の許可申請なしに破壊され、そのまま太陽光発電施設が建設される事例が複数確認されました。この背景には、制度運用上の課題が存在しています。文化財保護制度は本来、現状変更の規制によって天然記念物を守る仕組みですが、そもそも「そこに指定種がいる」という情報が行政や事業者には共有されなければ機能しません。一方で、希少種保全の現場では、乱獲や過度な観察による圧力から守るため、生息地情報を非公開とする慣行がありました。キタサンシヨウウオにおいても同様であり、この「情報を出さない保全」が結果として「存在しないもの」と誤認され、許可申請の手続きを経ない開発を招いてしまったのです。

てるい しげはる 1983年、北海道札幌市生まれ。大学進学を機に日本最大の湿原である釧路湿原を擁する釧路市へ。以降、キタサンシヨウウオの調査研究や保全活動を続けている。近年は、太陽光開発による本種の生息環境の減少に少しでも歯止めをかけるべく、個人的に生息地のナショナルトラスト活動も進めている。

生息適地マップの制作と公開

さらに、太陽光発電施設の設置に関しては、再工
ネ特措法（電気事業者による再生可能エネルギー電気の調達
に関する特別措置法）や電気事業法、都市計画法、景観
法、さらには環境影響評価制度など複数の法令が関
係しますが、20年の制度改正以前は、太陽光発電事
業そのものが環境影響評価法の対象に含まれておら
ず、法的な環境影響評価を経ないまま開発が進めら
れる構造にありました。さらに、改正後においても
対象となるのは大規模案件に限られ、多くの事業は
依然として自治体レベルでの対応に委ねられている
のが実情です。また、本来建築物の建設に対する規
制がある市街化調整区域においても、太陽光発電施
設が建築基準法上の建築物に該当しない場合が多く、
開発が制限しにくいという制度的な隙間も指摘され
ています。このように、個別の制度は存在してい
ても、それらが十分に連携せず、生物多様性保全の観
点が十分に組み込まれていない構造が問題となつて
います。

こうした状況を受けて、釧路市では新たな取り組
みが進められました。それが、キタサンシヨウウオ
の「生息適地マップ」の作成と公開です。このマッ
プは、研究者や博物館学芸員の調査成果をもとに、
生息の可能性が高い地域を示したものであり、具体
的な生息地点を明らかにすることなく情報提供が可
能となっています。これにより、事業者は開発予定
地における生息可能性を事前に把握し、必要に応じ
て調査や保全措置を講じることができるようになり
ました。さらに、この取り組みは釧路市にとどまら



産卵状況調査の風景（撮影：深津恵太）



表土を剥がされたキタサンシヨウウオの生息地

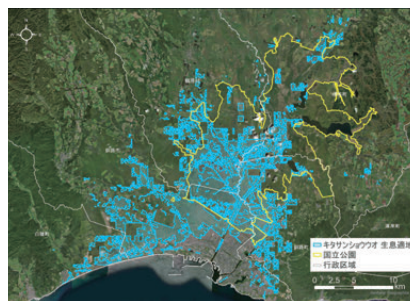
参考文献

環境省釧路自然環境事務所（2023）太陽光発電事業計画策定にあたって配慮すべき希少種の生息地について．https://kushirodata-center.env.go.jp/meeting/solar_webmap.html, 2026年5月23日確認
釧路市立博物館（2024）市指定天然記念物キタサンシヨウウオ．<https://www.city.kushiro.lg.jp/museum/bunkazai/1005708/kinenbutsu/1005711.html>, 2026年5月23日確認

ず釧路湿原自然再生
協議会の枠組みの中
で、釧路町、標茶町、
鶴居村を含む広域的
なマップへと発展し
ました。WEB上で
公開されたこのマッ
プは、事業者から自治
体への事前相談の増
加を促し、結果として
環境配慮型の事業計
画や回避措置の検討につながっています。また、自
治体職員による指導・助言の場面でも活用され、再
エネ導入と生物多様性保全の両立に向けた実務的な
ツールとなっています。

加えて、このマップは研究面でも有効に活用され
ています。広大な湿原の中で調査の優先順位を設定
する指標として機能し、20年から25年にかけて、こ
れまで未確認であった新たな生息地の発見にも寄与
しました。これは、情報公開と保全のバランスをと
る新しいアプローチであると考えられます。

キタサンシヨウウオの生息地の保全は、単に一種
の保全にとどまらず、湿原という生態系全体の維持、
さらには気候変動対策とも深く関わる課題です。今
後は、法制度の運用改善や関係者間の連携強化に加
え、科学的知見に基づく情報共有のあり方を見直し、
開発と保全の両立を図ることが求められます。釧路
湿原でのキタサンシヨウウオの保全の取り組みは、
その先進的な事例といえるでしょう。



キタサンシヨウウオの生息適地マップ
（作成：NPO 法人 EnVision 環境保全事務所）

「再エネか、自然か」という二者択一ではなく、「どこで、どのように」

景観をデザインするかという視点

「さびしくなったら湿原に行くといい。きっと懐かしい顔に会えるぜ」。今から30年ほど前、国立公園の勉強のためにカナダへ発つ私に恩師のT先生が贈ってくれた言葉です。「湿原」という言葉から思い浮かべるイメージは人それぞれでしょう。小さな花たちのことを思う方もいれば、農地の開拓に苦労されたことを思い出す方もいるでしょう。私にとって湿原はこれからもずっと「懐かしい顔に会えるところ」であってほしいと願っています。

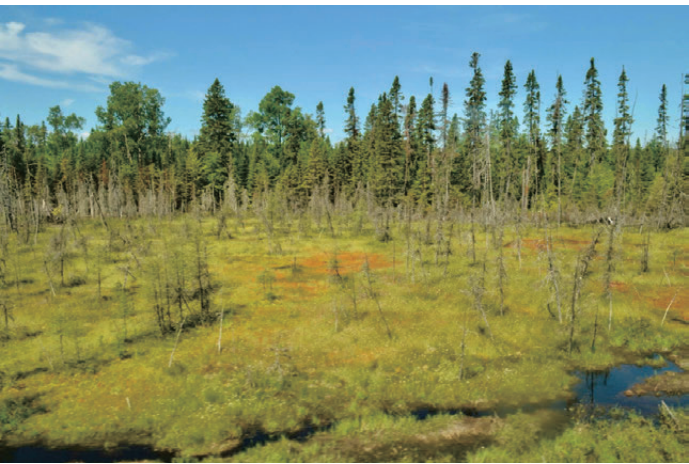
かし、地図に載らないような小さなものも含め、多くの湿原が今も失われつつあります。ラムサール条約では、登録湿地に限らず国内すべての湿地の保全・賢明な利用を求めています。

自然か」という二者択一に陥りがちですが、真に問われているのは「どこで、どのように景観をデザインするか」という視点ではないでしょうか。

「内在的価値」「道具的価値」に加え「関係価値」という枠組み

湿地の価値は多面的です。生物多様性の保全、水循環の調整（洪水緩和・渇水時の水の放出）、水質浄化、そして泥炭湿地に特徴的な炭素の長期貯蔵——湿地は、静かに、しかし確実に社会の基盤を支えています。しかしそれだけではありません。2000年代初頭の「ミレニアム生態系評価」は、自然を人類の経済や生活基盤として捉える「生態系サービス」という概念を普及させました。しかし、これは「人間にとって有用かどうか」という視点に偏りすぎているという反省から、IPBES（生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学・政策プラットフォーム）は、自然の価値をより多層的に捉えるため「内在的価値」

日本に残る湿原の多くは北海道に集中し、釧路湿原やサロベツ原野は北海道を象徴する風景と言えるでしょう。



懐かしい顔に会えたカナダのとある湿原

同条約締結国の日本はその責務を負っていることを私たちは忘れてはいけません。北海道は風況や日照に恵まれ、再生可能エネルギー（再エネ）の導入が急速に進む地域でもあります。風の良い場所や日当たりの良い場所は湿原や渡り鳥のルートと重なることが多く、湿原周辺に風車や太陽光パネルが並ぶ光景が広がっています。議論は「再エネか、

文・写真 ● 吉中 厚裕
(酪農学園大学環境共生学類教授)

よしなか あつひろ 酪農学園大学環境共生学類教授。環境省国立公園自然保護官、カナダ森林省北方森林研究所客員研究員、国連環境計画（UNEP）日本政府常駐副代表、国連生物多様性条約（CBD）事務局地球規模調整官などを経て2017年より現職。2025年にIUCN（国際自然保護連合）南・東アジア地域代表理事に選出。北海道自然保護協会理事、北海道環境審議会会長。

「道具的価値」に加え「関係価値」という枠組みを提示しました。

「関係価値」とは、自然と人間との関わりの中に生まれる文化的アイデンティティや「つながり」を重視する価値です。北海道で湿原を語るとき、この「関係価値」はとりわけ深い意味を持ちます。アイヌ文化において湿地の生き物たちはカムイ（神）として崇められ、固有の文化の根幹をなしてきました。「この湿原がある景色こそが自分の故郷だ」という感覚は個人のアイデンティティと深く結びついているでしょうし、湿原を守る活動を通じて地域コミュニティの絆が深まることもあるでしょう。湿地の未来を決める意思決定において、こうした「関係性」を見落としたまま進めば、たとえ手続き上は整っていたとしても、人々の心にストンと落ちるような「納得」は到底得られないのではないのでしょうか。

道具的価値 Instrumental Values	洪水防止・水質浄化・炭素貯蔵・観光収益など、人間の目的達成に役立つ価値。数値化・貨幣換算しやすい。	代替可能
内在的価値 Intrinsic Values	人間の利益とは無関係に、自然がそれ自体として持つ価値。生き物が存在し続ける権利。	代替不可能
関係価値 Relational Values	自然と人との関わりの中に生まれる価値。文化的アイデンティティ・生きがい・地域の絆・アイヌの世界観など。数値化しにくい、失われたときの喪失感大きい。	

湿原の「関係価値」は代替不可能

NbSにも通じる国際社会への大きなモデルケースへ

近年、環境問題に関する国際社会のキーワードは「つながり」「統合」です。IUCN（国際自然保護連合）が中心となつて「Nature-based Solutions（NbS：自然に根差した社会課題の解決）」という考え方を提唱しています。NbSとは、気候変動・生物多様性・地域の暮らしを、別々ではなく、同じ「ひとつの風景（ランドスケープ）」の上でまとめて考えようというアプローチです。ここでいう「風景（ランドスケープ）」とは、単に見た目の美しさだけではありません。その土地の自然の営みと、私たちの暮らしが重なり合つて形づくられる、「生きたつながら」そのものを指しています。再生可能エネルギー施設の建設そのものはNbSではありませんが、立地・設計・地域還元（ちいきくへん）の仕組みを工夫することで、湿地の再生や流域管理と組み合わせる統合パッケージとすることができれば、NbSとして大きな役割を果たすことができると考えられます。再エネ導入を「自然に迷惑（まご）をかけないよう」に終わらせるのではなく、「自然を保護し回復する仕組みとセットで設計し直す」。そのためには、ランドスケープ全体を見渡して「どこを守るべきか」「どこを回避し、どこで調

整し、どこに集中的に導入するか」のランドデザインを事前にみながら描く必要があります。湿原の健全性は、周辺の農地の排水や道路など、保護地域の外側の管理に大きく左右されます。守るべきものは「点」ではなくやはり「つながり」です。法律で厳格に指定されていない場所でも地域の合意と継続的な管理によって自然が保全されている場所を評価・活用する「OECM（保護地域以外で生物多様性保全に資する地域）」という枠組みなども活用しながら、関係価値を含む湿地の多様な価値を住民や関係者が共有し合い熟議しながら、国立公園といった保護地域のみならず、その周辺の農地・草地・森林・市街地など集水域も含めた大きなランドスケープのランドデザインを描いていくことが求められているでしょう。北海道における湿原をはじめとした自然環境と再エネの軋轢（あつれき）と調整は世界の課題の縮図です。もし、数値化できない多様な自然の価値まで含めた多面的かつ統合的な合意形成プロセスを北海道で確立できれば、それは国際社会への大きなモデルケースとなるでしょう。残された湿原を守り、劣化してしまつた湿原を再生し、同時に脱炭素社会へ移行する、そのために必要なのは「対立の言葉」ではなく、「統合の設計図」です。

参考文献 Millennium Ecosystem Assessment (2005) Ecosystems and Human Well-being: Synthesis. Island Press, Washington, DC
IPBES (2022). Summary for Policymakers of the Methodological Assessment Report on the Diverse Values and Valuation of Nature of the Intergovernmental Science-Policy Platform on Biodiversity and Ecosystem Services. IPBES secretariat, Bonn. <https://doi.org/10.5281/zenodo.6522392>

モーリー通信読者の皆さまへ

北海道の湿原に立つと、静かで変わらないように見えるその風景の下に、気の遠くなるほど長い時間が流れてきたことに気づきます。植物の命が枯れては蓄えられ、わずか一年に一ミリほどしか重ならない泥炭の層。その薄い層が何千年も積み重なり、いま私たちが立っている湿原の大地をつくりあげてきました。釧路湿原の果てしなく続く大地、サロベツ湿原の潤いをたたえたミズゴケ、霧多布湿原に咲く可憐な花々――

どの湿原も、それぞれの命がゆっくりと流れる時間の中で育まれています。その自然を前にすると、「人はどこまで関わっていいのだろうか」とふと立ち止まってしまうことがあります。同時に、私たちはこの地に生きる一人として、未来へ受け継ぐ責任を感じずにはられません。

そのような想いを、モーリー通信はずっと大切に受け止めてきました。

お読みくださる皆さまへ、誌面ではこれまで、北海道の豊かな自然や野生生物、そして保護の現場で懸命に活動する人々の姿をお伝えしてきました。ページをめくりながら、「自分にも何かできることがあるのでは」と感じられた方も少なくないのではないのでしょうか。そのお気持ちこそが、次の一步の始まりです。モーリー通信でご紹介している保護活動や環境教育、自然体験の取り組みは、多くの方々から寄せられたあたたかなご支援によって支えられています。

あなたが今日感じた「守りたい」という想いを、どうか行動に移してください。

継続的なご支援、一度限りのご寄付、どちらも心よりお待ちしております。モーリー通信巻末の振込用紙（払込取扱票）を使えば、郵便局で簡単にお手続きいただけます。皆さまがモーリー通信を通じて感じてくださった自然への想い、野生生物への愛情を、どうか実際の保護活動につなげてください。

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金



サロベツ湿原の自然再生事業地で生まれたモウセンゴケの赤ちゃん（幼い株）

北洋銀行と協定を結び、「遺贈による寄付」の受け入れ体制を整えました。

あなたの思いを、未来の自然へ

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、2026年2月、株式会社北洋銀行と「遺贈による寄付」に関する協定を結びました。

この協定によって、「自分が亡くなったあとも北海道の自然を守るために役立ててほしい」という思いを持

つ方々が、安心して当基金に遺贈寄付を行えるようになりました。

北洋銀行では、店頭窓口などで遺贈による寄付を希望されるお客様のご相談をお受けし、遺言などについての情報提供

を行います。ご希望に応じて代理店・業務提携として取り扱う「遺言信託」をご案内し、遺贈の手続きを安心して進められるようサポートしてまいります。

これまで当基金は、多くの方々からの温かいご支援に支えられ、野生生物の調査や保全活動、そして自然の大切さを伝える活動を続けてきました。今回の協定により、「遺贈」という形でのご支援をより安心してお受けできる体制が整い、北海道の自然を未来へ残していく力がさらに広がっていくことを期待しています。

【遺贈による寄付とは】

ご自身の遺言によって財産の一部を公益法人やNPO法人などに寄付し、社会や未来のために役立てる仕組みです。人生の集大成として、想いとともにご支援を届ける方法のひとつです。

※ご関心のある方は、北海道新聞野生生物基金事務局までお気軽にお問い合わせください。



左：北海道新聞野生生物基金・常務理事 水野信治
右：北洋銀行本店営業部・専務執行役員本店長 水本健一様

北海道新聞野生生物基金は、皆様の寄付で運営しております。

ゆうちょ銀行から

- 振込手数料が無料の専用払込取扱票を綴じこみました。事務局からの郵送も承ります。



Webから (Syncable)

- 手数料負担有無が選択可能
- クレジットカード等に対応

銀行振り込みの場合

- 振込手数料のご負担をお願いします。
- 領収書発行等のため銀行を通じて後日ご連絡をお願いする場合があります。
北洋銀行本店営業部 (028) (普)1456131
北海道銀行本店営業部(101) (普)1704635
口座名義 公益財団法人北海道新聞野生生物基金
(ザイ) ホッカイドウシンブンヤセイセイブツキキン

2027年版カレンダーの 販売が始まります。

北海道野生生物写真コンテストの全応募作から、厳選した写真で
カレンダーを制作しています。動物部門は、迫力の大判吊下げ型
とかわいい表情を集めた中判吊下げ型、植物部門は卓上型で美し
い花々を紹介、使用後はポストカードとして利用できます。

2027 CALENDAR



WILD LIFE
in HOKKAIDO
北の大地に息づく生命

私たちが暮らすこの大地は、無数のいのちが息づく自然の宝庫です。しかし、私たちの生活でいくつもの野生生物が、すでに姿を消すか、減りつつある状態に置かれています。子どもたちに伝えるべき、大切な自然の姿を、ぜひこのカレンダーを通じて、多くの人に知ってもらい、愛を持って守ってほしいと願っています。

価格 1,700円(税込)

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

吊り下げタイプ 動物シリーズ
「ワイルド・ライフ」
13枚綴り、縦51.5cm×横36.4cm
1,700円(税込)



卓上タイプ
「野の花と樹」
13枚、ケース付き、縦10.5cm×横20.5cm
1,200円(税込)



吊り下げタイプ 動物シリーズ
「かわいいどうぶつカレンダー」
8枚綴り、縦21cm×横29.7cm
1,400円(税込)

**企業カレンダーとしても
ご利用いただけます。**

「ワイルド・ライフ」「野の花と樹」は、
50部以上のご注文で企業名、住所、電
話番号、企業ロゴをサービスで印刷刷
します。
※費用など詳しくはお問い合わせ下さい。

お問い合わせは

公益財団法人北海道新聞野生生物基金
札幌市中央区大通東4丁目
TEL 011-210-5773 FAX 011-210-5774
nature@hokkaido-np.co.jp

取り扱い書店 ※10月以降、順次店頭に並び予定です

- 道内札幌、江別、函館、旭川、北見、釧路、帯広、根室、
士幌町の一部書店など
- 道外東京、茨城、大阪の一部書店など
- 道新オンラインストア



Doshin
Online Store

公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、北海道新聞社の創立50周年を記念して1992年に
設立し、北海道の豊かな自然環境と野生生物を未来に引き継ぐ活動を応援しています。

助成事業

北海道の自然や野生動物の保護に取り組む団体や個人
の活動を対象に、毎年応募を受け付け、選考のうえ助
成を行っています。



自然体験事業

動植物の専門家による出前講座、全道フットパスの
集いなどを共催し、学びや体験を応援しています。



普及啓発事業

自然を守る活動や生物多様性保全の取り組みを紹介
し、皆さまと一緒に北海道の未来を考えるシンポジ
ウムやフォーラムを開催しています。



出版事業

助成事業の報告、北海道の自然環境の現状の紹介、
写真コンテスト入賞作品など「活動する人と応援す
る人をつなぐ」をテーマに『モーリー通信』を発行し
ています。



当基金へのご理解と、ご支援、
ご協力をお願いいたします。



©手塚プロ

コンテスト事業

北海道内で撮影された野生生物の写真を広
く募集し、入賞作などを選び、ギャラリー
での写真展示など、北海道野生生物写真コ
ンテストを毎年開催しています。
北海道自然保護協会との共催で毎年、全道
の小学生を対象に夏休み自然観察記録コン
クールを開催しています。



収益事業

オリジナルカレンダーの発行、販売

北海道野生生物写真コンテストの全応募作品の中から厳選した写真で
制作しています。動物部門は、迫力ある大判吊下げ型と愛らしい写真の中判
吊下げ型。植物部門は卓上型で美しい花などを紹介し、使用後はポストカ
ードとして使えます。



札幌市円山動物園は1951年に開園した北海道で最も古い動物園です。
野生動物の保全を通じた生物多様性の保全に取り組んでいます。



さっぽろ円山動物園 サポートクラブ



円山動物園の応援団体「さっぽろ円山動物園サポートクラブ」は、2025年度から「特定非営利活動法人（NPO法人）」となりました。
今後、動物園の動物たちと地球上の動物たちがより幸せに暮らせるよう活動を行っていきます。そのために広く寄附を集めています。皆様からの寄附は、動物園内の飼育環境の整備、動物園を拠点とした環境教育、動物たちの本来の生息地の保全活動に使います。



札幌市動物園条例



2022年6月、札幌市は動物園のあるべき姿を定めた国内初となる「札幌市動物園条例」を制定しました。



動物園応援基金



札幌市は「動物園応援基金」を設置し、積み立てられた市民の皆様の寄附金を円山動物園の獣舎の改修等に活用していきます。

さっぽろ Sapporo Maruyama Zoo

円山動物園

<https://www.city.sapporo.jp/zoo/>

さっぽろ円山動物園サポートクラブ事務局 (maruyamazoosc@gmail.com)

札幌市中央区宮ヶ丘 3 番地 1
Tel: 011-621-1426

